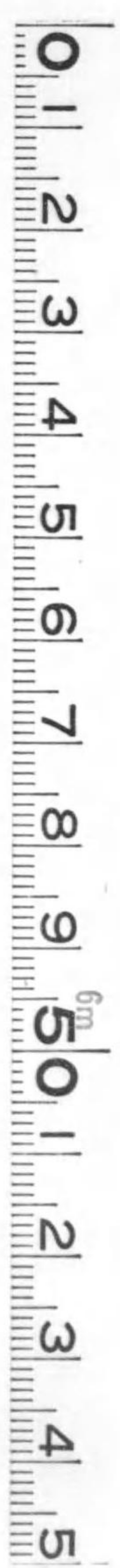
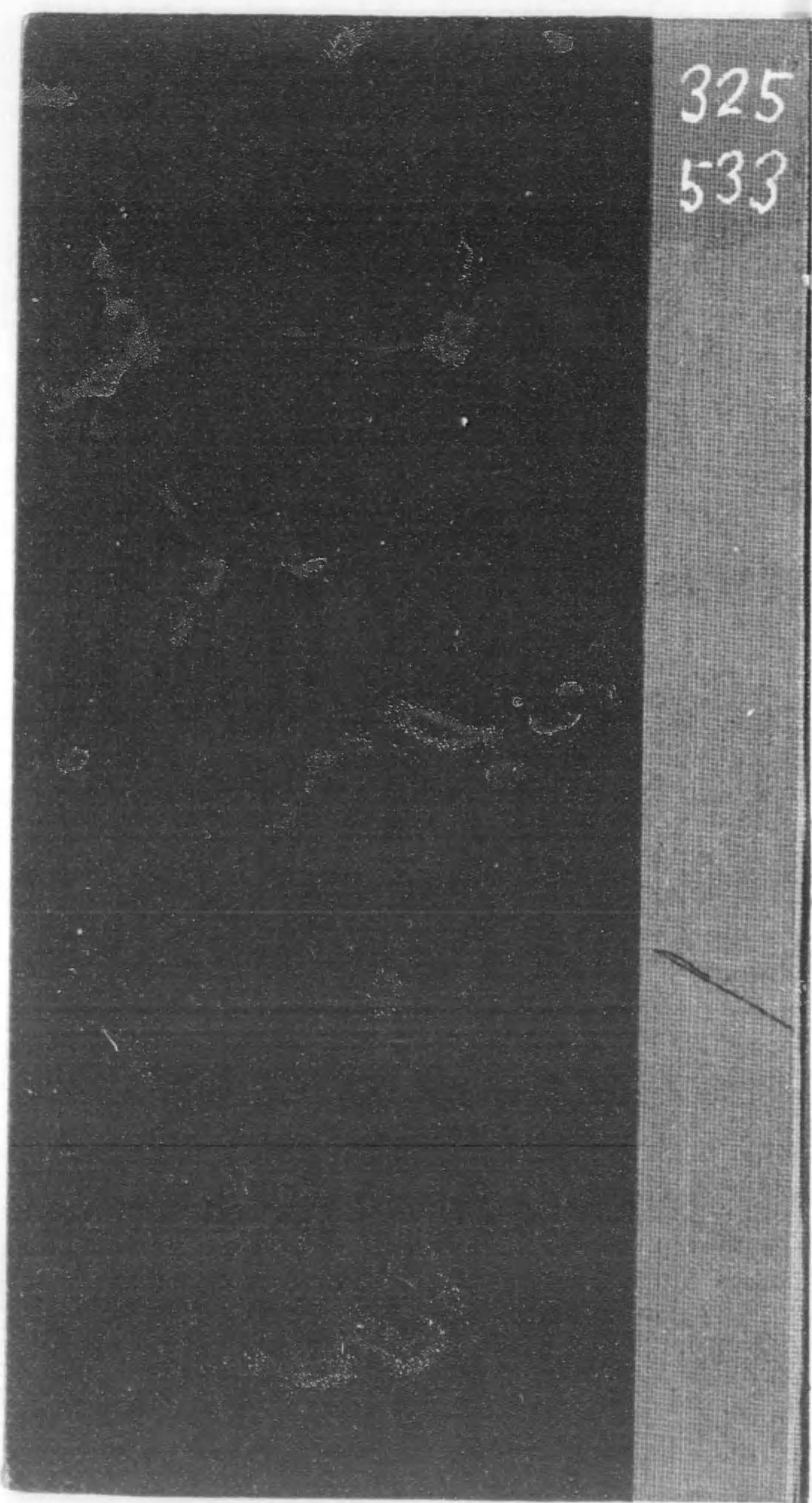


始



325  
533





25. 8 24



22703  
ミ

325-53



ジエー、ジー、ベレット原著  
澤田忠治抄譯

路加傳の特徴

福音圖書刊行會發行

大正  
8. 3. 5  
内交



## 序

著者が高遠の想、優雅の文は、其篤信と相俟つて『人の子』の御風姿をして、紙上に顯動せしめ、讀者をして不知不識の間に、活ける主の御前を樂ましむ。薄信不學の予妄りにそが抄譯を試みて、原文の妙趣を傷けたらんを恐る。又其第一章乃至第九章の如きは、十數年前の翻譯に係り、當時は聊かにても著者の意を殺がざらんことを努めたるが爲、圖らずも原文に泥づみ過ぎたるの憾みを遺せり。今にしてそれを改譯せんこと、多忙の予に取りて不可能の事なれば、止むなく殆ど其儘上梓することゝなしたり。されば主は昔者、一童兒の有てる大麥のパン數個を以て、能く數千の民衆を養ひたまひたり。希くは粗笨の小譯、幸ひに御祝用を蒙りて、若干の糧を讀者に提供し得んことを。

大正七年十月廿九日

青南の幕屋に於て

譯者しるす



# 路加傳の特徴目次

緒言……………一頁

第一段 基督の御降生及御幼時……………一〇

路加傳第一章及第二章……………一〇

—路加傳敘述の筆法は平易通俗なり—通俗の中に自ら聖靈の啓示あり—通俗の方法を以て幽玄なる真理を説明するが路加の任務なり—救はるゝ人の母と救主の母—歡び謠へ第二の創造の基礎は据ゑられたり—第二の創造の眞價の現はるゝは將來に在り—シメオン等は良實忠純なるイスラエルの残りの人(レムナント)なり—圓滿に發育し健全に進歩したまふイエスの幼年時代を敘せるは路加の特徴なり—イエスの學課は神御自身なり—其舉止言語は救主の御幼

目次



時たるに應はし

第二段 基督の受洗、系圖及試煉……………二四

第一 路加傳第三章……………二四

—此童兒が後年の大救世主たるべしとは誰も悟らず—世人を覺醒さする神の僕の際—人を罪の定まれる者と認むるがヨハネの使命—彼の使命は法律と預言者よりも一步進みたるもの—第一創造と第二創造との比較—第二創造に就て詩人の觀察—アダムに廻る系圖も本傳特徴の一—御子に就て御父の三様の御稱讚

第二 路加傳第四章……………三五

—第一の人アダムと第二のアダムとの比較—第二のアダムの戦捷—戦捷の效果は偉大—彼の賜ふ戦利品と世の提供する利益と何れを選ぶか—新たに生るゝに非ざれば此戦利品の絶對的價値は之を認むるに由なし

第三段 基督のガリラヤに於ける御教務……………四五

第一 路加傳第五章……………四五

—歴史的順序に泥ますして福音の原理を説く—主の榮えに照されて我が罪惡を識る—我が罪惡を知りて我れを識る—我が罪惡を知りて神を識る—被造物は神の部分的啓示にして恩寵は神の全體的啓示なり—主イエスに愛着し主イエスに心を奪はるゝ瞬間は一切の境遇を超越する瞬間なり—古酒を好むか新酒を好むか

第二 路加傳第六章……………五八

—祈禱は信賴の表白なり—十二弟子は主に關する事柄を能く知る人なり—然れど主に關する事柄を能く知ることゝ主の御心持を理解することゝは別なり—百夫の長やベタニヤのマリヤの如きは主の御心持を理解したる人々なり—主の事を聞きて主を理解せよ—盛んに活動せよ然れど活動をして神との交際と並



行せしめよ——馬太傳に於ける山上垂訓はユダヤ人を目標とし本傳のそれは一般人を目標とす

第三 路加傳第七章……………六八

——百夫の長物語に於ける本傳の特徴——「獨り」てふ文字味ひ深し——雲の奥、帕子の内を透視せよ——主の證人たる者の受くべき總ての結果に對して準備を怠る勿れ——然れど同時に私に譴責し公けに稱讚する主の寛仁と忠實、肝銘すべし——悲の調べ喜びの調べ——罪人の宴席に歡びて着座せらるゝ救主——「汝の信汝を救へり」——一大苦戰の場所——靈と肉との争闘——イサクを産めイシマエルを追出せ

第四 路加傳第八章……………八九

——沈黙の愛活動の愛——救済の恩に感激する結果——恩寵を證するに適當の人々——主の役務に二様の性質あり——豕を惜みてイエスを拒絶す——彼女の悲は彼女を主に導く——教會とイスラエルと世界との豫表

第五 路加傳第九章第一節乃至第五十節……………九八

——十二弟子役務並にヨハネ殉教問題に關する本傳の特徴——山上の變貌は聖徒身分の保證なり——榮光なるものは十字架の結べる果なり——肉なるもの榮光の前に置かるゝさへ不適當なり——梯子の上の秘密發表せらる——此變貌は前古未曾有の大事件なり而も尙ほ將來顯現せらるべき基督の宇宙的榮光の一斑に過ぎず——ステパノの變貌——贖罪事業の讚美せらるべき範圍は廣大

第四段 基督のエルサレムへの御旅行……………一〇七

第一 路加傳第九章第五十一節乃至末節……………一〇七

——此御旅行の初期——世人は主の御昇天を以て至當の要求と認むべきや如何——世人の輕侮を堪忍びて天に昇りたまはん御趣意なり——榮められたるに適ふ途を知り棄てられたるに處する途を知りたまふ——聖徒の新地位を獲たるは主の棄てられたまへるに由る——棄てられたる御方として我等の心魂に語りたまふ



第二 路加傳第十章

——七十人の復命に對する御訓戒——逆境に立ちて尙喜び得る秘義——完全なる神完全なる人——間に優る答——彼の要する唯一のものは實に此愛——法律に不朽の效力を附與す——捧ぐるマルタ受くるマリヤ——人性の奥に潜める神性の光輝——與ふる主義

..... 一三三

第三 路加傳第十一章

——所謂主の祈禱に關する教訓は誰に適用せらるべきか——主の祈禱と教會の祈禱との區別——切に請はゞなどか賜はらざらん——痛快なる辯駁——馬太と路加との異點——イエスの教務の有力なる一例

..... 一三四

第四 路加傳第十一章

——靈界の燈臺——馬太の方は森嚴なる説教路加の方は一片の茶話——貪慾を破壊する一大鐵槌——貪慾は主の再臨を待つ準備を怠らす——最高の憧憬を主に捧げよ

..... 一二九

第五 路加傳第十三章

——兄弟を訴ふるは其實己れを訴ふるなり——將來一層怖るべき大殺戮者パレスチナに襲來すべし——斯く思ひ悩みつゝ旅立ち給ふ——主エルサレムに入り給はゞ萬事休す——エルサレムの末路——噫、可憐のエルサレム——問はれたる事柄に重きを置かず問ふ人に重きを置きたまふ——靈魂を救はんとする愛の發現——人格の圓滿なる發達を期せよ——理智に偏せざれば則ち感情に偏するが我等の通弊なり——エルサレムに對する愛惜の情

..... 一三四

第六 路加傳第十四章

——譬拔なるイエスの答辯——首席を撰ぶはアダムよりの遺傳性なり——開宴の精神の相違——神若し此宴會の主人ならば——強制的に伴ひ來る——ひた勞れに勞れたまはん爲め——此群集は抑何が爲にイエスに來るにや——救主としての彼を満足さすものは何

..... 一四七

第七 路加傳第十五章

..... 一五四



——税吏の輩に圍まれたる喜の人——救ふ喜——我れ彼等を喜ぶ——福音は神を喜ばす音信なり——天とは何ぞや

第八 路加傳第十六章……………一五八

——不義なる番頭の意義——將來の幸福の爲に現在を犠牲にせよ——如何にして主に事ふべきか——所謂完成宗教家の倫理的價值如何——將來なる哉——公明正大の裁斷——龜鑑以上なり禮拜の問題なり

第九 路加傳第十七章第一節乃至第十九節……………一六三

——頭かやう心せよ——神の國の心理的要素——信仰は聖徒の新生活に動力を供給する心理作用なり——信仰の二個の重要な性質——禮拜問題——眞正禮拜の實例——天啓の趣旨を體認して禮拜するが眞正禮拜なり——教會は特殊の天啓と特殊の禮拜能力とを授かりたり

第十 路加傳第十七章第二十節乃至第十八章

第八節……………一七三

——神の國に二個の態様あり——神の國顯現の刹那の狀況——ロトの妻の末路に留意せよ——大能の内在——大能内在を意識したる結果——沮喪せずして祈れ

第十一 路加傳第十八章第九節乃至第三十節……………一八二

——如何にして神の國に入るべきや——神の國に入るべき資格の完備は自己没却に在り——肉は難破船なり——肉よりの脱却基督への没入——肉の無價値は證明せられたり——信仰の徳たる亦大なる哉——主は其教訓の趣旨を自ら實行したまふ

第十二 路加傳第十八章第三十一節乃至末節……………一八九

——噫此悲の時にして尙此憐あり——使徒等も當時は聖書に暗かりし——其後悟性は啓かれたり——其御道筋に獨り淋しく進みたまふ——信仰に依る普者の熱心——御父は斯の如くにして此淋しき旅人を慰め給ふ



第十三 路加傳第十九章第一節乃至第二十七節……一九五

——エルサレム試みられて罪に定めらる——御入城の御道筋に關し路加傳と他福音書との比較——ザアカイの回心はイエス御來世の主意に應ふ——主の初臨及び再臨問題——初臨に於ても再臨に於ても主を歓迎せざる者は碎かるゝ外なし

第五段 基督のエルサレム御入城及十字

架之事 ……………二〇一

第一 路加傳第十九章第二十八節乃至第二十章……二〇一

——ユダヤ國民は彼の御入城を歡びたりしや——反つて罪を設けたり——主の嘆かせたまふも理なり——刑罰權の行使は止むを得ざる事なり——而も神の召には變ることなし——棄られたまへりとは雖も依然として主權者たるの實質を備へたまへり——葡萄園の譬と十人の僕の譬との連絡——正當の奉仕——奉仕の原因に二種あり

第二 路加傳第二十一章 ……………二二一

——異邦人の時——富める人と寡婦——我魂の底かき動す——イザヤ書第六十一章第二節——刑罰の日と異邦人の時との關係——神の國は刑罰時代以前に來るものに非ず——異邦人の時は戰爭の時なり——エルサレム荒廢の預言に關し四福音書の比較——エルサレムに對する同情——大旱に驟雨——ユダヤのヨベル——世界のヨベル——希望——神は第一、希望は第二——希望に養はるゝよりも神に養はるゝが肝要

第三 路加傳第二十二章及第二十三章 ……………二二五

——ユダとペテロとに關する路加の特徴——エルサレムの女子とガリラヤの婦等との比較——恩恵作用を説く事微妙——聖靈の活動は靈妙偉大——漫りに信仰の果を論ずるは淺薄なり——路加特徴の實例一二——十字架上の御言表に關し四福音書比較——靈魂の獨立生存は可能なり——サタンの勢力範圍——死後は樂園へ——死を怖るゝ勿——樂園の主宰者——聖靈の内住は復活の保證——祝盃は苦盃の結果——眞の禮拜は主の創造したまへるもの——特徴は聖靈の御意匠



### 第六段 基督の復活及其效果

#### 路加傳第二十四章

——主の復活は開闢史上第二の曙——此事業の眞價を知りて神を知れ——舊約の根本義も亦實に是れ——頌榮は神に祝福は人に——復活の前後に於けるイエスの教務の相違——眞實を愛でたまふ——イエスが他人と見ゆる間は——御用の爲に準備せよ——人性を擧證したまふ——路加傳と使徒行傳との連絡——御父御子御靈の顯現——祝福は戰勝の結果——首尾一貫——最後の光景に關し四福音書比較——以西結預言の實體——人は高くせられたり——眞の祭司殿入の權能——素祭灌祭の實體——四書相待て基督の完全を證す——救主の御道筋を辿りたり——聖書の目的は情操を満足させる事に在るに非ずして靈魂を救済するに在り——聖書的知識をして絶對無二の良知たらしめよ

二二九

### 路加傳の特徴目次終

## 路加傳の特徴

ジェー、ジー、ペレット 原著  
澤田 忠 治抄譯



### 緒言

四福音書には、各々別の主意有り。従つて路加傳は、神の眞理の一方面を證するものなれば、茲に此傳の特徴生じ來る。大體の記述に於て、他福音書と一致するは勿論なれども、此傳の主意を貫かんが爲に、默示の靈は此傳に於て、此傳專屬の意匠を有せらるゝなり。



而も聖靈が、斯く福音書毎に別の教務を執りたまふは、是れ自家撞着に非ずして、神の眞理の各方面に涉りて、博く深く教示せられんが爲なり。かのアロンに灌がれたる膏は、讀むべき主の充實と徳性との秘れたる象徴なりしが、此膏は、没薬、菖蒲、桂枝及び肉桂など種々の香物を以て製造せられにき(出卅〇廿二―廿五)。福音書著者は各自、此聖所に於ける馨はしき稀代の膏に對し、其原料の一部を提出すること、即ち神のキリストにましますイエスの優秀と完全との一方面を宣傳ふること、蓋し其職務なり。誰か能く其全部を宣ぶることを得ん。福音書著者の如く、斯くまで近き默示を蒙りたる役者と雖も、其一部を宣べ得たらんには、此れにまさる喜と譽とはあらず。聖徒こそ、此全部を味ひて益する者なれば、宜しく其教へられたる所により、愛しまるらする御方を讃め歌ふべし『汝の香膏は、其香味たへに馨はしく、汝の名は、灌がれたる香膏の如し』(歌一〇三)。

いでや、福音書著者等に分任せられたる種々の教務の中にて、路加が擔當の職務を述べん。それ主は、馬太傳に於ては、メツシャとしてユダヤ人に接し、馬可傳に於ては、要求に應ふる役者として乏しき世に接し、又約翰傳に於ては、御父の御子として教會即ち、天に屬する家族に接し、其屬する天の家に適ひて之を薰陶したまふ次第なるが、路加傳に於ては、唯獨り神に是認せられたる人の子として、周く人類に接し之と御言を交へたまふなり。

『人の子』とは、甚だ廣き意義を有する御名稱なり。之は、完全なる人、神に適ふ人といふ意義を有し、又新らしき人たることを表示すると共に、有りと在らゆる人的美德の悉く彼の中に在ることをも表示す。イエスは人の子として卑くなりたまひしが(詩八〇五)又人の子として至上者の右に高められたまへり(詩八十〇七)。人の子として枕する所をも有したまはざりしと雖(路九〇五十八)人の子として將來神の國に君臨したまふ



べし(但七〇十三)。世界の裁判権は人の子としての彼に委任せられ(約五〇廿七)同じく人の子として教會の首(弗一〇廿二) 新郎(太廿五〇六) に在す。人の子として地にて罪を赦すの権能を有したまふと同時に(太九〇六) 御自らは十字架に釘けられ又復活らされたまへり(太十七〇九、廿二、廿三)。而して此間常に『天に居りたまひき(約三〇十三)。尙又イエスは人の子として、天地萬有の中心にまします(約一〇五十二)。そは、昔者神其像に人を造りたまひしも、地より出でたる第一の人此像を毀損せしに由り、神の子は之を回復し、人に關する神の御計畫を人として成就し、人の爲に備へられたる名譽と信用との地位を再興したまひたればなり。

斯くの如く『人の子』なる御名稱は、其關係の範圍最も濶く『萬物の上に在りて世々讚美を得べき神』(羅九〇五)たることを除き、イエスの人格、苦難、権能及び地位等に關係あるものなり。然り而して我が信する所に由れば、主が此御名稱の下に人類を待

らひたまひし、其行動を證することを路加の主意なりけれ。彼は、神より甚しく遠かりたる人類の中に来りたまひて、讚むべき神の側に立ち、受膏者たる人の如何なるか、又神意に適ふ人の如何なるかを啓示したまふ。廣き世界に、唯御一人清淨無垢の御方、聖靈に由りて建てられ人體を以て成れる神殿、而して常に聖靈に充たされて居たまふ(路一〇廿五、同四〇二)。斯る御方の御前に、世人の真相などか發かれずして止まん。神意に適ふ人として御自身を示し、以て世人の何たるかを露はにしたまはんこと、其御趣旨なりし所よりして、飽くまで清廉高潔の御態度もて、出來得る限り社交的人となり、殊更に人足繁き巷に入り込み、遭ふ人毎に言語をかはし、之と交りたまへるもの、如し。

吾人は斯の如き御方を、路加傳に於て學ぶなり。而して路加が其擔當の職務を遂行するに、適當の人なることに付きて一言せん。聖書の載する歴史を按ずるに、路加は、



かの異邦人の使徒の伴侶にして勞を共にしたり(西四〇十四、提後四〇十、門廿四)。此使徒はユダヤ人とギリシヤ人とに區別を置かずして、周く人類に教を傳へたる人なりき。而して我が信する所に由れば、路加其人が異邦人なり。此名は異邦人の中に見ゆる名なり。可羅西四章十四に於て、彼は割禮の兄弟等と區別せられざる様見受けらる。

以上路加傳の大意を説き、又著者が事をも記したれば、以下章を逐ひて此傳の細目に入らんとす。但し吾人が聖書を學ぶ唯一の目的は、主を喜び主を讃むる事にて有りたきものなり。其昔彼れの遺したまひし御功績を詳かに温ねて、御足跡を辿るは聖徒共同の喜びなり。苟も吾人が不斷の歡喜の目的たるべきものにして、彼の中に缺けたるものありや。愛情なくば冷き心を暖むるに由なく、同情なくしては荒びたる靈を靜むるの途なけん。而も其等はイエスの中に充溢れ在るなり。吾人、愛は人生幸福の淵源なりと知る。而も彼は愛其ものなり。吾人の情操は美を慕ふ。而も美は彼に於て完

全の域に達したり。靈覺(例へば使徒等の有したりし如き)の産み出す多種多様の智識は、吾人の心靈を慰む。而も斯かる靈妙の知覺は、彼にして初めて授け得る所のものなり。之を要するに、吾人は心の喜を主の中に求めんことを勉むべし。而して聖言の完全秀美を學ぶは、此喜を増大する方法の一なり。此書、觀察の皮相、所説の淺薄、素より言ふに足らず。而も希くは主の御祝用を蒙りて、如上の意を果す一助たり得んことを。

路加傳記者は、大體に於て歴史的順序を追うて、其教材を配置したるものなりと雖、主として倫理的順序を以て、其骨子と爲したるは疑ひなし。但し大體に於て歴史的順序を追ひたることは、其内容の左記六段に分れたるに由りて明かなり。

### 第一段 基督の御降生及御幼時

### 第一章及第二章



第二段 基督の受洗、系圖及試煉

第三章及第四章

第三段 基督のガリラヤに於ける御教務

第五章乃至第九章第五十節

第四段 基督のエルサレムへの御旅行

第九章第五十一節乃至第十九章第二十七節

第五段 基督のエルサレム御入城及十字架の事

第十九章第廿八節乃至第廿三章

第六段 基督の復活及其效果

第二十四章

右は路加傳教材配置の順序にして、素より歴史的順序なり。然れども此傳に於て、

主は特に教師として又一般人類を待らひたまふ御方として記さるゝが故に、福音の大原理大原則は適所に啓示せらる。此倫理的觀念が教材配置の主たる目的なるが爲に、時としては時日の順序に拘らざることあり。儲子が今記述する此小冊子の主意は、我所感を一通り陳ぶると共に、路加傳の特徴とする所に着眼するに在るなり。



### 第一段 基督の御降生及御幼時

#### 路加傳第一章及第二章

—路加傳敘述の筆法は平易通俗なり—通俗の中に自ら聖靈の啓示あり—  
 通俗の方法を以て幽玄なる眞理を説明するが路加の任務なり—救はるゝ人の  
 母と教主の母—歡び誦へ第二の創造の基礎は据ゑられたり—第二の創造の眞  
 價の現はるゝは將來に在り—シメオン等は良實忠純なるイスラエルの残りの人  
 (レムナント)なり—圓滿に發育し健全に進歩したまふイエスの幼年時代を敘せ  
 るは路加の特徴なり—イエスの學課は神御自身なり—其舉止言語は教主の御  
 幼時たるに應はし

路加傳を繙くに當り、先づ其初めに於て、己に本傳の、他の福音書と異なる性質  
 は彰はれ居るなり。ルカは本傳を、其友人テヨビロに宛て、認めたり。彼は、神の愛に

在りて同心たる、主にありて親愛なる友人が、本福音書に由りて、靈の修養を得ん事  
 を希望せり。彼は人としての愛により、友誼によりて、テヨビロと親めり。此筆法を  
 そ、實にルカの特徴なりけれ。加之、彼は其筆を執らんとする事柄は、全く自己の  
 見聞に係るものなりと言ひ、又其事柄に對しては、自ら人たるの智力と情性とを働か  
 せたるものなることを我等は認む。斯の如く、彼は自己の神聖なる職務に従事するに  
 當り、成るべく通俗の方法に據らん事を力むるに似たり。是れ他の傳道者と異なる所  
 以なり。

ルカは、人が其友人に贈るが如き筆法を以て記せし事、以上の如しと雖、其の一意  
 一言は、全然聖靈の啓示に出でたり。是れ時に彼自ら識らざる事を、言表するが如く  
 見ゆるふし有るによりて知らるゝなり。夫れダビデは、其位にキリストを座せしめん  
 との神の約束を知れり。然れども預言者としての彼は、默示によりて復活の事を言へ



り(徒二〇三十、三十一)。主イエスは其弟子等に命令を下したまへるも、此は聖靈によりてなし給へるなりと云ふ(徒一〇二)。茲に於てか、聖書は何れも神の默示たる事最も明かなり。主イエスが弟子等に命令したまへるにもせよ、ルカが友人に書を贈るにもせよ、何れも自己の智識にのみならず、聖靈之に印して我等に賜へるなり。

僭、是れより本傳の問題に入らんとす。但し前にも言へる如く、ルカは出來得るだけ平易なる筆法を以て、其本旨を陳ぶべしと雖も、是れ素より本傳の性質に合ふ事申分なきなり。ヨハネが神の子の御事を記すに當り「太初に道あり、道は神と僭にあり、道は即ち神なり」(約一〇一)とあるを見れば、其默示の如何に高尚なる旨意を以て初まりしかを知る。然れども、ルカは即ち然らず。一方面に於ける旨意の完全なるは勿論なれども、其筆法に於ては全く前者と異なれり。「ユダヤの王ヘロデの時に、アビヤの班なる祭司ザカリアと云へる者あり。其妻はアロンの裔にて、名をエリサベツと云ふ」

(路一〇五)。即ち一條の俗談の如く、眞理を平易に言飾なく説明せり。此單純なる物語により、神の巧妙なる御手に導かれつゝ、讀者の意思は、最も奥妙なる最も驚くべき光景に、神の恩恵と智慧の顯はるゝ場所に曳き入れらるゝなり。

ザカリアとエリサベツとは、恰もアブラハムとサラ、イサクとリベカ、又はエルカナとハンナなどの如く、義人なれども子は無かりき。彼等はイスラエルの最後の預言者が教へたる、義しき遺残者の取るべき其地位にありて、モーセの法律を守り、主の誠を虧なく行へり(馬拉基四〇)。然れども、子なきが故に、彼等の力は神の中に在る事、即ちイスラエルを回復する者を遣はさんと約束したまへる其神の中に在る事は、自ら證明せられたりき。而して此誠を虧なく行ふと云ふ事は、即ち約束の使者を迎ふる爲に、準備をなす事に他ならず。随つて此使者を迎ふる事は、即ち殿の主なる御方を迎へ奉らんがために、準備を爲す事にてあるなり。於て是、此の遺残者に對し



て、約束の使者なるエリヤは今現に遣はされ、此の使者たる人の生れたる事よりして、遂には殿の主たる御方(馬拉基三〇)の御降生となれり。而して彼は恰も白日に先づ黎明の如く、此御方の先驅として、イスラエルに顯はれんとはするなり。偕、前二者の出生に就ては、各々異なる點あり。ヨハネの生るゝや、約束の子なり。彼は神が特別なる賜を以て、母體の天賦の官能を再び力付くることに由て生れたり。然れどもイエスは神の子にして、更に天性に藉る所なく、全く天性以上、即ち聖靈に由て生れ給へり。前者は石女の子、後者は處女の子なり。然れども更に驚くべき相違の點は是れなり、エリサベツは救はれたる者の母、マリヤは救主の母なり。エリサベツの子は潔められたる者、マリヤの子は潔むる者なり。其懸隔も亦大なる哉。石女の子は常に救はれたる者、即ち神の家族の記號なり。是れ虚弱なる者、又は乏しき者に對する、神の恩恵と賜物とを意味す(賽五十四〇一、約一〇十三、羅九〇八)。然れども諸子は偕に肉と血とを具

ふるが故に、イエスも同じく是れを具へ給ふと雖も、其處女の冢子、又獨子に在し給ふの事實は、御自身に充足る徳を備へ、全然天性以上の御方たるを示すなり。

斯の如く至上者の預言者は顯はれ、至上者御自身も亦顯はれ給へり。イスラエルの使者も遣はされ、イスラエルの神も亦來り給へり。前者は以て黎明に比すべく、後者は白日に比すべし。此時までは凡て暗黒なりき。元來、律法なるものは、之を行爲の契約として見る時は、單に人間を暗黒なるものと證明するの外なく、又之れを來らんとする善事の證として見る時は、即ち唯だ善事の陰にして、恰も夜中の星の如く、地上は尙ほ暗黒に蔽はれ居る事を告ぐるに過ぎざりき。然れども今は時世一變、神は方に顯はれ給へり。而して『神は光なり』。

斯の如く、一新時期はこゝに到れり。しかも喜樂と自由とに充てる、嚴肅なる状態に於て來れり。かゝる状態は、讚むべき神の來りたまふことに應はしきの状態なりと



す。往時第一の創造の基礎は、歡呼の聲と共に据ゑられたりき（ヨブ卅八〇七）。この歡呼の聲は、受造物に幸福を與ふることが、神の御目論見に相違なきことを保證せんが爲に、天より受造物に差出したる一種の保證なりき。然り而して『神は愛』にいましたまへば、この御目論見は神に取りて眞に必要な御目論見とこそ申すべけれ。本章に於けるも亦之と同じく、今やベツレヘムに於ける幼兒は、第二の創造の基礎として据ゑられたまひ、歡喜は再び天地に充てり。神は地上に顯はれたまひたれば、如何でか喜樂なからん。『尊貴と稜威とは、その御前にあり。ちからとよろこびとは、その聖所にあり』（代上十六〇二十七）。悲哀は其御前に止まること能はず、悲哀のパンは至聖所に於て食ふべからざるなり。それ聖と喜とは共に彼處にあるなり。視よ天の使は讚美し、牧羊者は喜、音を繰返し、マリヤ、ザカリヤ又エリサベツは妙なる恩恵を語りて止まず。シメオンの望は叶ひ、アンナの寡婦なることは過去り、而してかの胎子さ

へも、腹の内にて歡び跳れるならずや。然り、老若男女を問はず、總ての者は喜べり。而してこれは、かの晨星相共に歌ひたる喜びよりも、甚だ優りたるの喜びにてありしなり。第一の創造に於ける喜の、人間の墮落によりて、乍ら悲と變じたるが如く、茲なる喜も、シオンの女の鈍きと、此世の惡により、亦忽ち失せ去るべしと雖も、なほ其基礎は、先きの場合と同じく、聖き喜と共に据ゑられたるなり。

あゝ本章の光景は、如何に麗はしき哉。バビロンの捕擒の放たれたる以來、永き悲惨の日は終れり。視よ朝陽はかゞやき、天は開けたり。即ち神は茲に、衰頹の状態に於けるイスラエルを、再び訪ひたまへるなり。

誰かこれを豫想したりしや。祭司は祭壇にありて常務を執り、ナザレの處女は日常の家政に身を委ねをりぬ。彼等牧者もまた、定業のごとくして、羊群を守りおけるが、恰も好し主の榮光は輝きわたり、天使は直接に神の前より顯はれたり。聖所に遠慮も



なく入り来りて、祭司に使命を告げしがブリエルほどの者が、處女の賤が伏屋をも厭はずして訪ひたるを以て見れば、天より此世を訪問せる其方法は、如何にも自由自在に又如何に恩深きものならずや。而して天より訪問せる此事實は、一層幸ひなるかの日の抵當なり。將來、これより一層幸ひなる日が来るに相違なきことを、保證せんが爲の抵當なり。但しがブリエルは祭壇に立ちたりと雖も、かの昔日のエホバなる使者（士師十三〇二十）の如く、壇の火焰の中にありて昇りもせず、また殿に立ちたりと雖も、後日エホバなるイエスの如く、自身を指して殿より大なる者なりともいはざりき。何となれば彼はたゞ一個の使用人としての職責を果すに過ぎずして、決して其以上の地位を取らざればなり。

嗚呼これ如何に幸福の日なる哉。然りと雖も、これより一層優りたる眞正の幸福の日は、將來の王國に在らん。其日こそ此の自由自在なることや、恩深きことや、または輝きや喜びなどが、一層深く實驗せられ、神の差入れたまへるこの抵當が、其價格よりも更にまさりたる物を以て應せらるゝに至らめ。我神の取りたまふ御手段は、それかくの如し。神は其御手の業を自ら説明し、一切の事柄を明白に表示したまふべく、其恩寵的約束を、約束通りよりいや増りたる有様にて成就げ、總ての者を祝福したまはん。

この兩章中に、マリヤ、ザカリヤ及びシメオン等を用ひて、言ひあらはしたまへる聖靈の御言表あり。彼等は意餘り、情溢れてこの言表をなせり。壯なりといふべし。我等幾分にも彼等に倣ひて心溢れ、御靈の與ふる愛情に充されたらんには、その幸福は如何ならん。然れども我等の靈は、頂垂ること多からずや。

〔著者註曰、我が聞く所によれば、ユダヤ人はメツシヤの事を記すにあたり、しばしば「慰むる者」といふ文字を用ひたり。茲にてシメオンがメツシヤを待望めること



を指して記されたることにも、「イスラエルの民の慰められん事を待望む者なり」(路二〇二十五)とあり。由て思ふに、主御自身が約翰傳十四章十六において、聖靈を指して「別に慰むる者」と言ひたまへるも蓋しこれが爲ならん。」

斯の如く二人の幼兒等の出生と、之に關する天地の歡喜とは、この兩章に於て、いとも美妙にしるされたり。また各章の終りに於て、この聖き幼兒等の少年時代の事柄、即ち彼等が智慧も齡もいや増りゆけること見ゆ。かゝる記録は、本傳に限るものにして、前にも言へる如く、よく其主義に適へり。主を一個の御人として學ぶ次第なるが故に、その御幼少の有様を記せることは、事柄其者を觀るも、また本傳の性質の上より之を觀るも、唯だ是れ稱讚の外なきなり。御成人の後、神に喜ばれたまはん如く、今は幼兒として神に喜ばれたまふ。獻身的御生涯のこととして、神に喜ばれたまふことは、何れの時期に於ても異なることなし。視よ、今はナザレに在りて兩親に従ひ、神

と人とに愛せられたまふ。期に到りて實を結びたまふこと、總て此の如し。神の證人として世に向ひたまふの時は未だ到らず。今は人より愛せられたまふと雖も、かの時たらば其證の完全なるがために、却て人より惡まれたまはん(約七〇七)。然れども今は唯だ是れ完全なる兒童として、家に在りて兩親に順ひ、其御品性に應はしき凡ての美はしき飾をもて御身を裝ひ、かくして人の心と良心とに、御自身を示したまふなり。

イエスはまた、神を敬ふ事に關する、總ての智慧を得んことを力めたまひ、その智慧は歳と共にいや増さりき。イエスの御質問の發表せられたる場所は、エルサレムの殿なりしを以て見れば、彼の學課は神御自身なりき。然り、彼は實に神のみを學びたまへるなり。人々は學校に就き、孜孜として諸般の知識を蓄ふ。然れども、イエスの求めたまへる知識は、總て至聖所に適へる知識なりき。彼は其勉強の結果を、學校に持ち出さずして、之を神の殿に持出したまへり。



然れども、人はイエスを識らず、其親戚は彼を悟らざりき。蓋し彼等は、イエスの善良にして、人に喜ばるゝ幼児に在したまふことを知れるが故に、其同行の人々、彼を親しく見んことを願ひて、其中に引留めたるならんと思へり。母たる者の空想は、蓋し斯の如きものなるべし（約翰傳二章三に於ても、マリヤの意思につき、之と同様の例あり）。彼等イエスを見失ひし時、肉の思ひに従ひて之を探したれど、見當らざりき。茲に於てか、人間の憫むべき性質は曝露れたり。マリヤの空想や、其方角違ひの場所を探せし事や、其驚きたる事や、又は無智なる叱責など、何れも人間の如何なるかを顯はせり。「何故我を尋ぬるや」（路二〇四十九）と言ひて、イエスは彼等の汚れたる性質を曝露き初めたまへり。然り、この幼児は實に左の如く言ひたまふことを得。「我は汝の證詞を深くおもふが故に、わがすべての師にまさりて智慧多し。我は汝の訓諭を守るが故に、老たるものにまさりて事をわきまふるなり」（詩百十九〇九十九百）。あゝ神

は曾てこの世界に於て、其全心の御喜たりし一個の目的、一個の人を有ちたまひき。これ素よりイエスに外ならざるなり。思ふて茲に至れば、我等の心に慰藉みち、感謝の念禁すること能はざるなり。



## 第二段 基督の受洗、系圖及び試煉

### 第一 路加傳第三章

——此童兒が後年の大救世主たるべしとは誰も悟らず——世人を覺醒さす神の僕の聲——人を罪の定まれる者と認むるがヨハネの使命——彼の使命は法律と預言者よりも一步進みたるもの——第一創造と第二創造との比較——第二創造に就て詩人の觀察——アダムに遡る系圖も本傳特徴の一——御子に就て御父の三様の御稱讃

第三章の時期に達するまでに、もはや幾多の歲月は過ぎ去れり。モーセの青年時代に於けるが如く、イエスの同時代も、人の理窟と不信仰とに妨げられつゝ、経過せりと謂つべし。モーセは曾て我が手を以て、神がイスラエルを救はんとしたまふ事を、彼等

悟るならんと思ひたりしが悟らず、却て彼等の不信仰は、四十年間モーセを彼等より遠けたり。恰も之と同じく、モーセより大なるイエスは、イスラエルの中にありて父の事を務め居り給ひしが彼等は之を悟らず、彼は時期の到るまでイスラエルを離れてナザレに往きたまへり。其間と雖も、皮は神の前に完全なることは變りたまふことなく、人の不信仰の爲に、此の聖き御方の境遇こそ變れその御心は依然として變ることなく、ナザレに下りて兩親に順ひ、善き幼兒として目を送り、神と人にとに歡ばれたまへり。

然れども第三章に入りては、事體全くあらたまり、二人の幼兒は己に成長して、其イスラエルに顯はるべき時期方に熟したり。此場合、ルカは世界の形勢を詳にのべたり。ルカがかくなすは素より其職分なり。これ前にも言へるが如く、本傳に於て聖靈は、周く人類にみこゝろを注め、且つ之れを待らひたまふ次第なればなり。本章に



於ては、かの異邦人の獸は、其見込の通り諸般の國務を整理し、爲に天下は太平を致せり（セカリヤ一〇十二）。羅馬人テペリオは帝位に座し、彼が部下なる地方長官等は各其の任地にあり、ユダも彼が版圖に歸し、祭司も亦殿に在りて務をなせり。宗教と云ひ、政治と云ひ、全地は悉く人の希望に適せるの狀態なり。然れども神の御目より之を視れば、一の曠野たるに過ぎず。此處は神のやすらひたまふ、又はすまひたまふ場所にあらす。茲を以て神の僕の聲は、恰もアハブの惡しき日に於けるエリヤの如く、世の人々の結べる安逸の夢をさまざまとて響きわたれり。

神の思考は人の思考と異なり、人の安息の場所は神にとりて曠野なるが故に、神は曠野として地上に活動きたまふ。法律は既に人を試み、人なるものは、全然義をもたざること明かになれり。此時に當りヨハネは遣はされたり。彼來りて、人は其罪すでに定れる者なることを認すべしと宣べたり。彼はかゝる罪人に對する救済の途が、

神の御手に在ることを指示したりと雖も、之をば既成の事實として、あからさまに言はず。人間の空なる事を説き、之を根本より曝露たりと雖も、彼の手には一層優れる收獲の種を携へ來れるにはあらず。彼は人に死の宣告を與へたり。されど之に生命を與へず。實に生命と能力とは後に御子に由て來るべかりしなり。即ち『ヨハネは休徵を行はず』（約十〇四十二）。彼は人々に、勉めて天國に入るべき事を強いたれども、其門をばひらかざりき。『彼は光にあらず、光に就て證を爲さんために來れり』（約一〇八）。要するに彼は神とイスラエルとの中間に立ちて、一方に於ては、イスラエルの肉なる事、肉は即ち草に等しきものなる事を告げ、他方に於ては、イスラエルの神エホバなるイエスを指示して、報應はその御手に在り、また御自身の御工をなしとげたまはん事を宣傳へたり。

ヨハネの教務には、義と恩とを含む。『彼は義道をもて來り』（太二十一〇三十二）、世より



離れて歩み、力めて世との關係を避け、己が光を以て暗黒を責めたり。人々に己が罪人なることを自覺せしむるは、彼の職務なりしを以て、彼は食ふことをせず、飲むことをせずして、世の人々に向ひて哀みをなせり。然れどもこれと同時に、彼はまた恩の道をもて來れり。これ彼は、イエスの先驅となり、救と王國との道を備へんが爲に、主の面の前に遣はされたればなり。かく彼の教務は、恩と義とを併有し、法律と預言者とに比して、一步を進めたるものなりき。それ法律は肉にあるまゝの人をして、之を欠けなく守らしめんとし、預言者は法律を擁護しつつ、人を從順の途に立歸らせんが爲に、一切の點に於て人を助けたり。神の寛容は如斯にして、人なる者は果して己を回復し得るか、又は正義の中に立ち得るかを試みたり。されども、ヨハネの教務は、總て右等の如き希望を空しきものと見做し、人をば其罪のすでに定まれる者と認定せり。以上は、神の智慧によりて定められたる、教務の順序なり。但しヨハネの

教務は、今日現に行はるゝ處の、高貴なる教務には比すべくもあらざるなり。使徒等は主の復活したまへる後、人々に信仰によりて罪の赦を得んことを宣傳へたり。今は恩と救との光、恰も正午に於ける太陽の如く、我等の上に輝き、我等をして更に榮光と王國との顯はるゝ時を待望ましむ。

茲に少しく我が所感を陳べん。神は元始より、第一の創造に比し遙かに優りたる、遠大の事業を御計畫あらせられたり。それ第一の創造に於ては、その管理を人間の手に委任せられたりと謂ふを得べく、従つて人間の忠實なると否とは、第一の創造の歴史を左右するものにてありき。然るに、神は第一の創造以前に於て、既に御子の中に、又御子によりて、何等の事情あるに拘らず、決して失敗に終るが如き事なき、一の事業を計畫したまへり。主が「天地は廢るべし、然れども我言は廢る可からず」(路二十  
一〇三十三)と曰ひたまへるは、即ちこの深意を言現はすものなり。第一の創造は廢る



べく、贖罪即ち道なる御方の工は廢ることなし。そは活ける神はこれに御自身を聯ねたまへばなり。預言者が御子なるイエスを指していへることに、『汝いにしへ、地の基をすゑたまへり。天もまたなんぢの手の工なり。これらは亡びん。されど汝はつねに存らへたまはん』(詩百二〇二十五、二十六)と。かく造られたるものは、悉く震はれん(來十ニ〇二十七)。これ神御自身が其の基礎にあらず、また神につらなりをらざればなり。然れども神と共にいまし、又神にいます、道なる御方肉體となりて、贖罪事業に御自身を聯ねたまへり。彼は葡萄樹、又家の隅の首石に在す。斯く贖罪の事業は其高妙絶美こと、第一の創造に比し、霄壤の差あるなり。本章に於けるヨハネの教務に『草は枯れ、花はしぼむ。然れど我等の神の言は、永遠にたゝん』と曰へり(イザヤ四十〇八参照)。この事業の實は總てくちす、即ち贖はれたる者の生命も、體も、其の受くべき産業も、亦くちざるなり(哥前十五章、彼前一章参照)。かく神は、第一の創造に於ける人間の罪惡不

法を以て、御自身のあやにたふとき御名の榮めらるゝ機會となし、第二の創造の不變不朽の基礎を確立するの機會となしたまへり。

詩篇の第九十篇は此の極意の幾分を解する者の言表に似たり。彼は神を以て諸々の造られたる力以上の御方なりと認はし、尋で第一の創造の空しきことを述べ、而して恤憫の事業、即ち贖罪の事業を望みて慰めを得たるやうにするせり。我等もこれと同じく、周圍の空しきを見て哀む時に當り、道たる御方の事業、即ち肉體となりて顯はれたまへる神の事業によりて、慰められ勵まざるゝなり。ヨハネの教務は、人をして一切の空しきを感じしむ。然れども御自身と其永遠不變の業によりて、我等に此の慰めを與ふるは即ちヨハネの後に來れる御方なり。

本章に於ける主の系圖は、馬太傳の系圖の如くダビデにもあらず、アブラハムにもあらずして、遠く人祖アダムに遡れり。これ既に言へる如く、路加傳の本旨に適ふ。



而して約翰傳に系圖の録されざるは、これまた其傳の本旨に適ふことなり。抑系圖なるものは、個人若しくは國民の親族關係を表示するものにして、ユダヤの系圖が聖書に（歴代志略上第一章——九章參照）記録せられたるより見るも、これは人的血統の秩序を明かにし、また之を維持する上において欠くべからざるものなり、父の心その子女を念ひ、子女の心その父を念ふに至るといふ、かの將に來らんとする王國に於て、人的血統は明確に區別せられ、正當に維持せられん（セカリヤ十二〇十一—十四）。但し我等には、系圖に心を寄すること勿れと教へられたり（テモテ前一〇四、テトス三〇九）。何となれば教會なるものは、天に屬する親族關係を有する者にして、人的血統の秩序を明かにし、または之を維持せんことを務むべき者ならざればなり。

第四章に移るに先ち、予はこゝにて主がバプテスマを受け給へる時、神の子と認はされ給へる事に就きて一言せん。主は路加傳一章三十五に於て『神の子』と稱へられ

給ふべきよし記されけるが、其處にては、主御自身を認證せられたり。今此處にてバプテスマを受けたまへるに當り、再び『なんぢは我愛子』云々とあるは、これ主の御教務が認證せられたるにて即ち主の御教務は、神の御心を充分喜ばせ奉るものなりとの意なり。こは罪人にとり、如何ばかり幸なる哉。法律は、決して斯の如く神に喜ばるゝことなかりき。そは法律は人より義を強請たればなり。バプテスマのヨハネは、決して斯の如く神に喜ばるゝことなかりき。そはヨハネは人を助けずして、却て人を罪に服させたるを以てなり。然るに今や、御子は恩を以て來りたまひ、罪人を癒し、神の愛の御目論見を成就したまひたれば、神はこゝにやすらひたまふことを得たり。茲に於てか、主が御教務を行ひ始めたまふに先ち、父の御歡びは言ひあらはされ、讚稱の御聲は發せられたり。尙ほ又三度目には、かの聖き山に於て『これ我が愛子なり之に聽くべし』（ルカ九〇三十五）との御聲と共に、主の王國は認證せられんとす。總ての



膝は、彼の前に屈かまらざるを得ず。彼に聴きかざる者は、其民の中より絶たたるべきなり（徒三〇二十二、二十三）。（著者註に曰く、『之に聴くべし』とは、ペテロがイエスをばモーセ及びエリヤと同等の地位に置けるにより、之を譴責せられたる御言なり。）斯の如く、主イエス御降生ごかうせいの時とバプテスマを受けたまへる時と、また山上に於て御姿みすがたの變れる時とに於て、神は彼の神の子たることを認證にんしやうしたまへり。即ち第一は主イエス御自身ごみづかみ第二は其の御教務ごきやうむ、第三は其の御治世ごちせいに對してなり。換言くわんげんすれば、神は彼によりて、飽あまで満足したまひたれば、全地は宜しく彼に服從ふくじやうし、其御言ごごんを謹聽きんちやうすべしとなり。以上三回、神は其の御聲ごこゑを以て、主イエスの神の子たるを認證にんしやうしたまひたるが、此後、復活ふくくわつの場合に於て、右の認證にんしやうは事實を以て完まつたせられ、且つイエスは『大能ある』神の子にいたしましたまふこと顯あはれんとす。（譯者曰、茲に『大能ある』なる文字は、原著者之を羅馬書一章四より引照いんせうせり。これは大切なる文字なるが、我等が從來使用せる和譯

聖書には漏もれたり。蓋し、主イエスは、御自身の復活ふくくわつしたまへるのみならず、また、かのラザロを復活ふくくわつさせたまへるなどの如き、以て其大能ある神の子にいたしましたまふことは、明あかにせられたるなり）。

## 第二 路加傳第四章

——第一の人アダムと第二のアダムとの比較——第二のアダムの戦捷——戦捷の效果は偉大——彼の賜ふ戦利品と世の提供する利益と何れを選ぶか——新たに生まるゝに非ざれば此戦利品の絶對的價值は之を認むるに由なし

然れどもアダムが神の子にてありたりし（路三〇廿七）如くに、神の子として認證にんしやうせられ、しかも人類との關係を以て、かく認證にんしやうせられ給へるイエス（路三〇二十二）は、これサタンの決して看過かんくわすること能あたはざる御方なり。初めの人はじめが其譽ほまれある地位を失へるは、



これサタンの詭計わづらひによるものなれば、彼れサタンは此處にて、神の子たる認證まことしめしめの復興たふさせる事に對し抵抗たいかうせずんば止まざるなり。往昔むかし神は人を創造し、之を御自身の像かたちの如くに造り給へり。然るに人は己おのが汚れたる『其像かたちに循したがひて』(創五〇三)子を生うむに至りたれば、其生うまれたる子供等は、最早『神の子等』(創六〇二、四)と稱よへらるべき價値ねいちなきものとなりぬ。然るに一旦失うしたる此譽ほまれある地位を、人として再び固守こしゅせんが爲に、今やイエスは顯あはれ給へり。茲に於てか惡魔は、此地位に對する人としての彼の實力じつりきを試こみずしては止まざらんとす。彼は此目的を以てイエスの許もとに來り、彼を誘いざなはんとて『爾もし神の子ならば』と曰へり。これ實に受膏者じゆかうしやと人の大敵たいてきとが交戰かうせんの日なり。勝利は何れに歸すべきか。兩者の間、眞まことにこれ危機一髮ききいっぱつ。而してイエスは正ただに勝かちたまへり。併しかも極めて氣高けだかき態度たいどにて勝かち給へり。初の人アダムあだむの周圍まわりにありし物は、何れも神の味方となりて、惡魔あくまに敵かみせるなりき。視みよや彼の樂たのしき園う、そのあらゆる風

景けいの美うしさ、此處ここ彼處あそこに河流かはあり、また菓實くだみや薰物かんとくなどある、その心地よさ。尙なほは又萬またの受造物うつくらしものが、命いのちのままに侍つかづき事ことふるなど、皆みなこれ異口同音いこうどうおんに、神の味方となりて、敵たいかうに對抗たいかうしたりしならずや。然れどもイエスの居いたまひし場所ばしょは曠野あらのなり。其處そこは何物をも彼に捧たげずして寧やすろ彼かれを『饑うゑ』しめたり(路四〇二)。而して彼と共に居るものは野獸やじゆなりき。斯かの如く皆みなこれ惡魔あくまの勸誘すすめに従したがひて神に敵かみせり。アダムにはすべてのもの味方し、イエスにはすべてのもの敵かみせり。然れどもアダムは敗まけ、イエスは勝かちたまへり。塵ちりの人はすべてのものを味方としてすら尙惡魔あくまに敗まけ、神の人はすべてのものを敵としてすら尙惡魔あくまに勝かちたまへり。嗚呼ああこれ何等なんじゆの戰捷せんせつぞや。この戰捷せんせつによりて再び人より得えたまへる神の御心みこころの御満足ごまんじつは、それ果はたして如何いか。この戰捷せんせつを得んが爲ためにイエスは聖靈せいれいに導みちびかれてこの戰場せんぢやうに到いたり給へるなり。これ惡魔あくまの工わざを毀こしたん事は、其使命しめいなりければなり(約壹書三〇八)。茲ここに於て、彼は更に神の榮さかえを顯あらはさん爲







の權利あるものたる事を。我等の飲む水は、盗みたるものにあらず。其パンは竊かに食ふものにあらず。これ食ふもの、口より得たる食物、強き者より採りたる甘き物に外ならざるなり（士十四〇十四参照）。斯の如きは、主が罪人としての我等に施し給ふ祝福の性質にして、其功勞によりて收得したまへる戦利品なり。本章に於て我等之を拜受す。イエス聖靈に満されて（路四〇二）悪魔と戦ひ、之を禦ぎ而して之を倒し、また聖靈に満され（同〇十四）祝福を携へて罪人に接し之を癒し、之を救ひ給ふ。而して曠野に於ける此の戦の後、カルワリーに於て死の能力を有てる者に遇ひ、彼處にて死を以て之を滅ぼし、また復活後、再び全世界の罪人等に其戦利品を分與したまふ。我等は確乎たる心を以て、此榮ある祝福をうち眺めて喜ぶなり。

然れども罪人にして此の祝福を尊重する者ありや。將た又神の子の戦利品をもて其身を装ふものありや。これ疑問なり。今や唯一の疑問なり。人なるものは此の祝福に

頓着せず、此の世の神が審かれたる此の戦捷、此の戦利品に對して意を注がざるなり。曠野がサタンの何者なるかを表示したる如く、ナザレの會堂は、人の何者なるかを表示せり。我等の傍にある輻重、即ち此の世の貨財は、我がダビデの齎したまへるかの戦利品よりも、我等の目には貴く見ゆるなり。ナザレに於て其の然る所以を見る。彼處に於て人の懇望は暫時妨げられぬ。人々、イエスの恩深き御言を奇しむ、彼を熟視めたり。彼等は一時、イエスの恩を喜べり、其御言を懇望せり。然れども此の喜び此の懇望は乍ちにして消散しぬ。何が爲に消散せるか。彼等が心の傲慢によりてなり。『これ木匠の子にあらずや』（太十三〇五十五参照）と言ひて、暫時論争せり。これ其の傲慢なり。一時イエスの御言に傾聽せる心も、この傲慢の爲に妨げられたるなり。宜なる哉、彼等の愛情はあしたの雲の如く、又たどちに消ゆる露の如し（何六〇四参照）。親愛なる讀者よ、現今に於ても尙ほ斯くの如し。此種の衝突にして若し今日起ると



せば、神と其の受膏者とに敵する意向は、必ずや人の心に於て勝を占めん。神の言、心魂に徹底れる結果にあらずして、たゞ一時限りにイエスを悦ぶか、若くは之を賞讃する人ありとするも、彼は己が天性の力に制せられて、遂にこのナザレの會堂に於ける場合と同様の結果を得べきなり。人の心に描ける此の世の貨財、若くは家にある貨財は、神の祝福よりも一層多く懇望せらるゝなり。人は曾て此の祝福を銀參拾枚にて賣れり。加之、一碗の食物とすら尙且つ交換せられたることありき。豈これ嚴肅なる問題ならずや。『己の心を持つものは愚なり』(箴廿八〇廿六)。そは、神は之を持つみ給ふこと能はず、人の中には神の持たまふことを得るもの一もあるなし。イエスが奇跡を行ひたまへる時、之を見たるもの、中或人々は之を信じたりしが、イエスは御自身を彼等に托ねたまはざりき。本性の人には、一として取るところなきなり。『汝等は新たに生れん事を要す』(約三〇七英文直譯)。「我等をして世に勝たしむるものは我等が信

なり』(約壹書五〇四)。人は或る事柄に對して、己が心を決定することあらんも、かく決定したる後、其の決心は試みられん。人の心構へ、即ち信仰によらずして、肉によりてなしたる心構へは、遂にサタンの爲に壊崩されん。唯真理に支配せられつゝ、聖靈によりて神と同心ことのみ、人をして直く歩ましめん。最も優勢なる人の天賦の氣力と雖も、遂には粉碎にせられらんなり。

右の外本章に於ては、神の子の愛の疲れず、耗きざること記さる。彼ナザレを去り、かの戦利品を携へてカペナウムに下りたまふ。彼が愛は、當時一切の反抗に勝ち得て餘りありき。其後と雖も、此愛は、死にだも尙ほ勝ち得て餘りあることは、自ら證明せられたり。『愛は永久も墮ることなし』(哥前十三〇八)。而して今もなほ神の子は、右の戦利品即ち恰も最近の日に於て、收容したまへるもの、如く、かく斬新なる戦利品を携へて、御自身と共にこの戦利品を喜ぶものを探ねつゝ、罪人の住ふ此の世界を



遍歴しつゝありたまふなり。

それ如斯く本章は路加傳に於ける、神の子の御教務の第一歩なり。而して此の福音書に於ては、主が特に人類を待ひたまふ次第なるが故に、頓てこゝに人の何者なるかを我等に示されたるは、趣味深きことなり。即ちかの傳道者のしるせる如し。『すなはち茲に一箇の小さき邑ありて、其中の人は鮮かりしが、大なる王これに攻めきたりて、これを圍み、これに向ひて、大なる雲梯を建てたり。時に邑の中に一人の智慧ある貧しき人ありて、その智慧をもて邑を救へり。然るに誰ありてその貧しき人を記念する者なかりし』(傳九〇十四、十五)。まことやナザレの會堂は、此の世界の住民に對し、右の聖言を事實に於て證明せるものなり。

### 第三段 基督のガリラヤに於ける御教務

#### 第一 路加傳第五章

——歴史的順序に泥まずして福音の原理を説く——主の榮えに照らされて我が罪惡を識る——我が罪惡を知りて我れを識る——我が罪惡を知りて神を識る——被造物は神の部分的啓示にして恩寵は神の全體的啓示なり——主イエスに愛着し主イエスに心を奪はるゝ瞬間は一切の境遇を超越する瞬間なり——古酒を好むか新酒を好むか

本章に記されたる事件は、總て他の福音書にもこれあるを以て、予は特に此の福音書の特徴とする處にのみ、注目せんとするなり。

已に先にも言へる如く、路加は、時日の順序、其他之に類する事柄には、左のみ意



を用ゐず。何となれば、人々の本心に向つて福音の原理を宣ぶること、これ其本領なればなり。如斯例は我等の中にも之あり。たとへば茲に一個の人ありて、他の人に向ひ、或る事件を物語ることありとせんに、此人の談話の目的が、單に事件其物にありとせば、彼は其事件の時日と、場所とを、精密に述べんことを務むるなるべし。されども、彼の目的が、此事件を一の材料として、或る主義を説明するか、若しくは、眞理を主張するかに在りとせば、彼は此事件の時日に付きては、左のみ意を用ゐざるべし。如斯、五章に記されたる事件の中、多くは四章にあるもの(誘試の場合を除く)よりも以前に起りしなり。かのシモン召を蒙りて、人を漁る者となりし事は、其母の病の癒されし事よりも、以前に起れる事件なりし如きは、即ち其一例として見るべし(太四〇十八—二十、同八〇十四、十五、可一〇十六—十八、二十九—三十一参照)。然れども、事件の起りたる時日が、如斯前後することは、これ路加の敢て關せざるところなり。何

れの事件が前なりしか、又は後なりしか、これ路加の目的にあらず。彼の目的は、實に原理を述ぶるにあり。神は如何なる御方に在したまふか、人は如何なる者なるか、これ其目的なり。されば時日の前後には頓着せざると同時に、彼は他の福音書著者の注目せざりし點を述べんとするなり。即ちシモンの召に於て、倫理的な主義、併かも驚嘆すべき大原理を述べんとはするなり。

而して彼が述べんとするところ如何。一個の人が、全く神の大能の下に、携れ來られたるを示すこと、即ち是なり。シモンの舟は、實に意外の大漁をなせり。然れど此の大漁も、人の天性の途を歩む者に取りては、何の意味もなく、これによりて人が自分の罪を感ずるなどのことは毫もあるなし。然れども、神の途に於ては即ち然らず。神の途は、人をして其罪を感せしめ、又は悔改めしむるやうに導くものなり。我等はたと神の光によりてのみ、適切に己を知ることを得るものとす。昔者、神を畏るゝ人



々は、一般に、神を見たる者は活けること能はずと思へり。アダムが神の前を遁れて、かの園の樹の間に身を隠したる以來、彼等は常に如斯良心有ちしなり。マノアは神を見たるによりて、死せざるべからずとなし(士十三〇二十)ギデオン亦然り(士六〇二十二)。エゼキエルはエホバの榮光を見て俯伏し(結一〇二十八)、ダニエルは、かの示現を見たる時、顔色全く變れり(但十〇八)。イザヤは、萬軍のエホバに在します王を見奉れる時、己が唇の穢れたることを悟れり(賽六〇五)。如斯は、これ己を正當に學べるものと謂ふべし。但し己に由りてにもあらず、又彼等自身を互に比較してにもあらず、實に神に由りて己を學べるなり。即ち聖書に所謂、己れ神の榮光の前に、立つに堪へざるものたることを學べるなり(羅三〇二十三参照)。

ペテロに於けるも亦かくの如し。神の榮、今や彼の目前にあり。他の人々は蓋し之を悟らず。普通の漁夫に取りては、大漁それ何かあらん。唯だ是れ網の打方が、最も

機に合ひて僥倖なりしといふに過ぎざるのみ。然りと雖も、神の導きたまふ人の耳には、些細の事柄もなほ、重大なる事件を告ぐるなり。かの壁に穿てる穴は、預言者をして一大憎惡事件を發見せしめしならずや(結八〇七一三参照)。人の手平大に過ぎざる雲と雖も、神の人の眼には、神の工と讚譽とに充ちたるものと見えたりしならずや(王上十八〇四十四参照)。一言の御命令を以て、海中にある總ての物を、自由自在に動かしたまふ御方、今やペテロの面前に立ちたまふ。茲に於てか、此の大漁は、天の導きを蒙れる罪人に取りては、正しくこれ、神の榮とこそは知られけれ。此の榮の輝くや、忽ち彼は己を學べり。其目に神を見奉りたれば、塵灰の中に伏して、自ら己を恨みぬ。これ前に言へる、マノア初め、昔時の人々が己を學べる様に髣髴たり。如斯、神の光によりて、己を知ることより、悔改の主義は生じ來る。我等は己が履歴に、多くの失敗あるを想ひて、悲み愧づ。然れども、神の榮と其前の光に照して、己を見ると



きは、御靈の御働によりて、此失敗を悔ゆるに至る。我等は太陽の光線に射らるゝ時、又は神の榮の光輝に照らさるゝ時、恰も茲なるペテロの如く、己が黒きを學ぶなり（雅歌一〇六参照）。

以上陳べたる方法によりて、我等は己をも知り、また神をも知るなり。我は我が愆と愚なるとによりて、己の何者なるかにつきて、大いに悟るところあるべし。然れども、神の榮の光に照して、己を見るにあらざれば、未だ以て正當に且つ充分に、己を知ることはざらん。之と同じく、神の諸々の工によりて、神の能力と、神の神たる所以に關し、多く學ぶことを得べしと雖も、己が罪惡の暗黒を認はしつゝ、神を見たてまつるにあらざれば、未だ神を全く知ること能はざらん。イエスキリストは、我が如き罪人の入用を備へ、其極めて豊なる溢るゝばかりの恩により、我が暗黒と耻辱とを永遠に取除きたまへり。此の御方の面に於て、我神を見奉る。是に於てか、我は

實に神を知るものとはなれるなり。アダムの神を知るに至れるも、亦爾ありき。かの六日間の神の工は、アダムの爲に造られ、是等は悉くアダムに與へられたり。然るに此外に神は尙ほ、アダムに與ふべきものを有ちたまへり。語を換へて言へば、是れ丈けにては、神のすべての御徳、即ち神の神たる所以は、未だアダムの知らざるところなりき。然らば即ち彼は如何にして、神を知れりや。寔に彼の犯罪こそ、秘れたるすべての財寶を呼出したれ。『彼は汝の頭を碎き、汝は彼の踵を碎かん』（創三〇十五）。これ神の如何なる御方なるかを、啓示すところの聖言なりき。『婦の苗裔』こはそも一の秘密なり。これ受造物の能く説明し得るところにあらず。こはエデンに於ける總ての菓物よりも、一層まさりたる財寶なり。而して、これをアダムに與へたるものは、創造的勞力にあらずして、恩なり。罪の増すところには、恩も愈増るといふ、この恩はアダムをして、此財寶を獲せしめたるなり。アダムは正に、如斯にして神を知れり。



今日、罪人が神を知るの途も、亦之に外ならず。而して此途は、死の奥義と、生の奥義との接續たるものなり。即ち神の光に照らされて、我儕は己の果して何者なるかを知り、其の全く暗黒ものたる事を悟る。これ死の奥義なり。これと同時に、我儕が罪惡の所以によりて、神御自身を知り、其全く善にいましたまふことを學ぶ。是れ生の奥義たるなり。

あゝこれ如何に幸なる真理なる哉。それ主イエスは、人々の心と良心とを穿ち、また、もろ／＼の真理、もろ／＼の主義を聲言たまふ御方なるが、この點に眼をとむるは、これ路加の特徴にして、また全く御靈の取りたまふ御手段なりといふべし。然り、これ御靈が路加を用ゐて、我が主をば大教師として、宣べたまふ所以の御手段たるなり。さて此處にて、『二艘の舟：沈まんばかりなりし』ことにつき、予は尙ほ述ぶるところあらんとす。ペテロは此の沈みかゝることを、後にこそ恐れられたれ（太十四〇三十参照）

此處にては、これによりて其心少しも動かされず、之を感せず、また、意を注めざりき。彼は他の事を考へ、他のものに見とれたり。實に主イエスの御徳に心奪はれたるなり。されば己がことを考ふるの餘地もなく、また恐怖を抱くの餘地もなかりしなり。總じて、疑惑と恐怖との取除かれ、またすべての混雜の取鎮めらるゝは、此の如き場合にてせらるゝものとす。それ然り、然れども、ペテロは此の感覺をば、常久に不變もちこたへえたりしや。イエスの充足れる御徳に感じたる、此の新なる感覺は、早晩鈍ることなかりしか。憐むべし、この感覺は此の後果して鈍りたり。キリストを視る其心の目は曇れり。そは彼が、かの水を恐れたるは、實に此の後なればなり。あはれ愧づべきことなる哉、悲しむべきことなる哉。親愛なる兄弟等よ、我儕の群の中に、最も輝き喜べる者、失敗したりしならずや。ダビデは、我儕贖はれたる者の中に、愛すべき且つ名譽ある地位を占むるものなるが、彼少き時、其初陣に於て、かの



巨人に向ひてすら『今日エホバ汝をわが手に付したまはん』(母前十七〇四十六)と、言ふことを得たるほどの人なり。然るに、このダビデすら、此の後、其心に『是の如くば、我早晚サウルの手にほろびん』(母前二十七〇二)と、言へることありき。而もキリストは我儕の爲に、其の御生涯は申す迄もなく、御死に至るまでも、總ての事に於て神の御悦を完うし、神より稱讚を得たまへる御方なり。ダビデが怖れたるサウルの手は、その會て侮りけるかのゴリアテの手に比して、爾かく大なるものならざりき。然らば則ち知る、ダビデの見たるキリストは、彼が後に見たる時には、其の會てエラの谷に於て見たる時の如く、爾かく大なる御方、充分なる御方とは見えざりしことを。

十二節以下の事件は、他の福音書にも見えたるを以て、此處には之を省きつ。但し本章最終の一節『舊酒を飲みて立刻に新酒を飲む者は有じ。是れ舊は最も好しと云へばなり』の聖言は、これ此の福音書の性質を説明するもの、一なれば、予は之につ

きて述べん。此聖言は人の性質に於ける一大秘密を發くものにして、即ち人の諸種の習慣と、思考との力が、人的方法にて活動ときは、人の靈魂に於ける神の御活動を妨ぐるものなり、といふにあり。我儕は今日に至るまで、舊酒即ち古酒(我儕の出生てより、肉なるものが我儕に供給し來れるもの)を飲み來れり。於是、新酒(天性及び肉なるものよりも後に、神の御子が此世に持來りたまへるもの)に對する、我儕の嗜好は妨げられぬ。それ我儕の天性は、古酒を好みて、新酒を好まざることとは、これ我儕の熟知るところなり。預言者の言へることに『エテオピア人その膚をかへ得るか。豹その斑駁をかへ得るか。若しこれをなし得ば、惡に慣れたる汝等も善をなし得べし』(耶十三〇二十三)とあり。今や、こゝなる大預言者も亦これと同様の智慧を以て、我儕を戒めたまふ。其言に曰く『舊酒を飲みて、立刻に新酒を飲むものは有じ』と。親愛なる讀者よ、こはそも嚴かなる教誡ならずや。誠に神は能はざるところなく、い



やが上にも恩を施したまふ御方にましますなり。然れども我儕は宜しく、古酒に對する嗜好を抑制すべきなり。我儕の心に浮ぶ思考、若くは心に起る願望は、これ古酒を飲みたる結果にあらざれば則ち新酒を飲みたる結果なるべし。兩者の中何れかに屬せざるべからず。たとへ分量は少きにもせよ、我儕は、新古何れかを飲みをるものなり。於是、我儕各自の心と良心とに對して、嚴かなる質問生じ來る。汝は何事を考へ居るや。今は何れを試味をるや。新酒か、若しくは古酒か。汝は肉の爲に準備をなしをるにはあらざるか。或ひは之に反して聖所を歩み居るか。汝の思考は天より來れるか、但しは陰府よりか。これ質問なり。即ち我儕が、毎時毎分己が靈魂に向つて試むべき質問たるなり。聖徒が此世を歩む途すがら、肉の爲に準備をなしたる結果は、遂に彼をして、悲哀と恥辱とを學ばしむること屢々なり。ノアが酒に酔ひたるは、其生涯の初めにあらずして、實に彼が農夫となりて、葡萄園を植りたる其後なりき(創九章參照)。

かのハザエル、エリシャに對し、怒を含みて答ふらく『汝の僕は犬なるか、何ぞか、る大なる事をなさん』(王下八〇十三)と。然れども犬の性癖をして、忌憚なく其儘に活動かしめば如何。時到らば唯是れ其の暴行を、選うせんのみ(王下八〇十五)。「われ謂ふ、汝等靈に由りて行むべし。然らば肉の慾をなすこと莫らん」(加五〇十六)とは、これ神の御保證なり。親愛なる讀者よ、たとへ僅なりとも、如斯歩むことを得たるならんには、我儕の言詞は一變して『新酒は最も好し』と、言はしむるに至らん。これ我が讚むべき主の求めたまふところなり。我儕は宜しく肉なるものを拒み、肉と性癖と慾とを抑ふことを常習とすべし。この高潔なる用心深き習慣を養ふときは、かの優等なる新酒は、我儕の好むところとなり、また隨つて、我儕にとりて結構なる味のものとなるべし。願くは、御靈の溫柔なる、しかもまた、強力御手、日々我儕を如斯導きたまはんことを。



## 第二 路加傳第六章

——祈禱は信頼の表白なり——十二弟子は主に關する事柄を能く知る人なり——  
然れど主に關する事柄を能く知ること、主の御心持を理解すること、は別なり——  
——百夫の長やベタニヤのマリヤの如きは主の御心持を理解したる人々なり——主  
の事を開きて主を理解せよ——盛んに活動せよ然れど活動をして神との交際と並  
行せしめよ——馬太傳に於ける山上垂訓はユダヤ人を目標とし本傳のそれは一般  
人を目標とす

本章に於ける事件もまた等しく馬太、馬可の兩福音書に載せられたり。然れども余  
は使徒の選任が、祈禱の後に在りしことにつきて述べんとす。これ他の傳道者等の注  
目せざるところなり。主が斯く祈禱をなしたまへることは、此の福音書中他の所にも  
數回しるされありて、等しくこれ路加の特徴なりとす。然るに此の祈禱は、主が神の  
子としてにもあらず、またユダヤ人としてにもあらずして、一個の人として我儕の眼

前に顯はれたまふことを我儕に示すなり。元來ユダヤ人なる者は法律の下に在る者な  
れば、祈禱を爲すべきものとして特に召されたるにあらず。これ法律はユダヤ人をし  
て、己が力の上に立たしむるを以てなり。之に反し、祈禱は信頼の表白にして、受造  
物の一種たる人類の第一の職分なり。彼は斯くの如くにして、自分に取れて何不足な  
き充分なる御方として、また己が力として、神を待望むべきものなり。

十二使徒の任命は、自今以後かれらば、特に主御自身の周圍に束縛せり。これ彼  
等は主と偕に居るべきものなりければなり(可三〇十四)。然るに此點につきて予は、靈魂  
の修養上、有益と信ずることを少しく述べんとす。

人の事柄を能く知ること、此人の心持を理解すること、は別物なり。予は或人の  
様子と、この人が日々に出遇ふ事柄とを傳へ聞ける所よりして、此人の心持を理解す  
ることを得べし。然れども、この人に關する事柄を精しく知ることには、予は到



底この人に事ふる僕等に及ばず。而して此の實例は、主の御經歷に於て最もよく學ぶことを得るなり。

かの百夫の長、サイロビニシヤの婦またはラザロの姉妹なるマリヤの如きは、他の人々に比し、主と偕に居ること至つて少なく、主の到らせたまふ場所へは、何處にても隨行し奉るなどのことなく、唯だ其過ぎたまふ御道筋に於て、時々御目にかゝる位の事に過ぎざりき。然れども、主に接し奉る場合には、彼等は最も聴く、また極めて賢きものとなりて主を待遇し奉れり。主は如何なる御方にいましたまふか、即ち主の主たる所以を知るの知識は、彼等の舉動に於て顯はれたり。彼等は、主をば毫も誤解することなかりき。之に反し、日ごと主の御側にありて事へまつる使徒等さへ、其天性の無知と神より遠かれることゝを表示こと屢々なりき。

こは我儕に取りて一の教訓にはあらざる乎。キリストに關する事柄を知ることの多

き割合に、主御自身をば靈魂に親しく味ふことの少きは、如何に怖るべきことならずや。我は此等の事柄に通じ、主のことを記したる書籍を読み、または主の御用を以て其目的とする諸種の仕事に多忙なることあるべく、尙また主に關する談話若くは著述等をなすことありとせんに、他の人々は、恰もかの百夫の長の如く、左程此等の事を取扱はざるにも拘はらず、彼等が神を知る事の進歩と、主を味ふことの實際とに至りては、甚しく我に優ることあるべし。サウロ曾てダビデを召して其家に置き、樂人として已に侍せしめ、己が欲するまに、彼をして樂を奏せしめたることありき。然れども、彼はダビデの何人たるかを知らざりき。

親愛なる讀者よ、これ誠に我儕に對する教訓なり。主の御側に侍べり、主の御足跡に従ひたる多くの人々は、ベタニヤのマリヤに向ひてすら、主に關する多くの報告をなし得たるに相違なし。主が何を爲したまへるか、何處を旅行遊ばされたるか、如何



なる説教をなされたるか、または如何なる奇蹟を行はれたるかに付ては、十二使徒を初め、ユダヤの地に居る數百の人々は、之を彼女に告ぐることを得たるなるべし。此類の報告の材料は、彼等豊かに之を有てり。然るにマリヤにとりては、自らの見聞によつて主の事を知るは甚だしく、唯だ之を彼等より聽くことを得たりしのみ。然れども結局、主を實際に味ふことについては、彼等は遠く彼女に及ばざりき。

而して今日に於てもなほ然らずや。或人は、キリストに關する事柄を報告し得べく、また多くの質問に對して正しき解答を與ふことを得べし。また或人は、この報告せられたる事柄、または解答せられたる問題によりて教を受くべし。然るに、此の事柄そのものを靜かに思ひ繞らし、靈魂の修養を受くることに於て、後者は却て遙かに前者に勝れりとせば如何。斯の如き例、我儕の中に多からずや。主に隨ひたる多くの人々及び使徒等が、キリストの事柄に關して得たる知識は、これ彼等自らの見聞によ

りて得たるものなるが、マリヤは彼等の報告によりて之を得たるなり。然るにマリヤが得たる此知識は、彼等の知識に比し、全く別物の如く特種の活力を有せり。彼等に倣ふ者と、マリヤに倣ふ者とは、今日に於ても尚ほ斯の如くなるべし。人々の群がる中にて懇懇に、さりとてまた熱心にイエスに近づきたるかの可憐なる異邦の婦は、主に最も親近すべき資格を有せる人々の思考を、愧づべきことと思ひしなるべし。然り、ペテロ其人の思考をもまた爾か思ひしなるべし(路八〇四十五)。

我儕の知識を神に適ひて利用せんため、または之を聖靈の能力によりて神と交はるの機となし、尚ほ又知識を用ゐて、我儕の新なる愛情を養ひ、之を活動せしむる事などのために、能力を賜はらんことを追求むるは、必要の事なりと雖も、單にキリストに關する報告其物を多く得んことを希ふは、我儕に取りて左程必要ならぬものなり。要は主の事を聞きて、主を理解するに在り。かくて、たゞかくてのみ、知識は我神の



旨に適ふものとなる。哥羅西書三章十六節の教によれば、我儕は知識を求め、もろ／＼の智慧の材料たる『キリストの道』を蓄ふると同時に、單純なる靈の愛情を養ふ様注意すべしとなり。心の中にて讚美することは、智慧と知識の言を蓄へたることに伴ふべきものとす（弗五〇十九）。然らざれば、知識は其味と能力とを失ひて、己れをも他をも益することなかるべし。

然れどもこれは、活動を抛棄さずする意味にあらず。また世に於て、イエスの御よろこびに與かることや、彼の人民と共に歩むことを抛棄さずするものにはあらざるなり。完全とはイエスの如くなることをいふ。活ける模範たるかの御方において、我儕が觀るところのものは是なり。即ち何れの場所、何れの時においても、人々の入用に應へんがため、役務を執りたまひ、かく御多忙なるにも拘らず、靈に於ては常に深く神の御前を感じぬたまふ。かくてこそ大本たる御方に十分ふさはしき御仕方とこそ申すべ

けれ。役務と神との交際と一致することにつき、或人のよめる有益なる趣味深き歌あり、曰く

をさなごのごと

みことばきして

まひるのうちに

すゝみつかへなん

みまへのさちに

やしなはれつゝ

本章二十節以下に於ける主の垂訓は、馬太傳に於ける山上の場合に同じ。この垂訓は、二回おの／＼別の場合にせられ、二人の傳道者が各自その一を記したるものなるか、或ひは垂訓は一回なれども、二人が各自別の筆法を以て之を録したるものなるかについては、我儕之を問ふの必要なし。（然れども、馬太傳に於ける垂訓は『山』（五〇）の上にてせられ、路加傳に於ては『平かなる地』（六〇十七）にてせられたりと或人々はいへり。また主が同一の事柄を何回も宣べられたる例あり。馬太傳九章卅二節



より卅四節迄と同十二章二十二節より二十四節まで並に同十六章二十一節、十七章二十三節、二十章十七、十九節等を對照せよ。聖靈は一般の人に對する御目論見を、馬太よりは寧ろ路加によりて行ひたまへることを我は信するなり。馬太傳に於ける主の御言は、恰も特にユダヤ人に宛てられたるかの如くしるされあり。彼所にての垂訓は、法律と預言者とを追想さしむるものなるが故に、別してユダヤ人の良心に徹するものなりと謂ふべし。然るに本章に於ては此事なくして、主は恰も一般人類に向つて語り給ふものゝ如し。『古の人々に告げて』云々又は『法律と預言者』たる事、若しくは當時ユダヤ人の中に流行を極めたる、かの斷食、施濟、祈禱等に關する種々なる誤謬を矯正されたるなどの事は、此處にしるされざるも、大凡倫理的のことにして、人の心と良心とに該當る事柄は、本章に於て之を見るなり（但し貪心に對する誠戒のみは例外なり。この種の誠戒は、一般の人類に對して與へらるべき性質のもの、即ち倫理的

のものなること勿論なれども、馬太傳にしるされありて、本章には之を省かれたり。其故如何となれば、この事は本傳の他章に於て、或事件と眞理との關係ある時に之を持出されあり。而してかくせられたる方、最も適實なるを以てなり。路十二章參照。

かくの如きは、この完全なる教師の意思に適せり。かれの教訓は如此、こゝかしこにて種々なる點より施されたり。彼は割禮ある人々の許に、使者として遣はされたまへるは眞實にして、其教務を實行したまふ時に當りて、ユダヤ人を觀過したまふこと能はざりしと雖も、また彼はユダヤ人を透して人類を見たまひたり。嘗にユダヤ人のみならず、人類の良心と情とに訴へたまへるなり。聖靈の思召は實に茲に在り。即ち如此方法を以て人類を待らひたまひたる主の意思を、路加に由て我儕に示すことこそ、聖靈の御歡にてあるなれ。



### 第三 路加傳第七章

——百夫の長物語に於ける本傳の特徴——『獨り』てふ文字味ひ深し——雲の奥、  
船子の内を透視せよ——主の證人たる者の受くべき總ての結果に對して準備を怠  
る勿れ——然れど同時に私に譴責し公けに稱讚する主の寛仁と忠實、肝銘すべ  
し——悲の調へ喜の調へ——罪人の宴席に歡びて着座せらるゝ教主——『汝の信  
汝を救へり』——一大苦戰の場所——靈と肉との争闘——イサクを産めイシマエ  
ルを遣出せ

本章の初に於ける、百夫の長の事柄は、他の福音書と異なる場所に録されたり。これ  
ルカが、單に事件そのものと、時日の順序とは、左程重きを置かざる一例なり。

本傳に於けるこの物語には、馬太傳のものに比し、一種異りたる風趣あり。こゝに  
は百夫の長が自分の代理として、ユダヤ人を主の許に遣はしたることとするしあれど、  
馬太傳にはこの事なし(太八〇五、六参照)。これマタイは他の傳道者に比し、一層直接に、

主を信するユダヤ人に宛て、書けるが故に、彼等が舊時の國民的傲慢を養成はんこと  
を怖れて、わざと之を省けるものなるべし。然るにルカは一層異邦人の爲に書けるに  
より、昔ユダヤ人が神の恩を蒙りたることを、異邦人に知らせんが爲に、此事を書加  
へたるなるべし。省きたる方も、書加へたる方も、兩つながら倫理的價値を有するも  
のにして、確かに聖靈の御計ひに由るものなるべし。されば之と同様、倫理上の目的  
を以て、ルカは百夫の長の信仰に對する、主の御註釋を記さざるにも拘らず、馬太は  
之を記せり(太八〇十一、十二参照)。之を記せるは、ユダヤ人の慢心を嘲らんが爲にして、  
之を記さざるは又、異邦人の心に、これと同様の感じの起る事を、防がんが爲にてあ  
るなり。

余の觀るところによれば、以上の區別は各々その場所に完く適合せり。さて次の物  
語は、ナインの寡婦のことなり(この物語は、たゞ此の福音書のみ記載せられたり)。



この物語は、やさしき仕方を以て、人の心を慰むることの物語なるが故に、聖靈は特にルカをしてこの事件をしるさしめたまへるなり。ルカは、一般の人類に心をとめ、其悲を思ひ、情を察するの筆法を以て、左の如く記せり。死したるこの少年は「獨の子」にして「其母は嫠」なりといひ、また主が彼を甦らせたまひたる時に「之を其母に予せり」といふ。この文體、この風趣は、全く人的筆法に據れり。即ち此福音書に於ける主の意思に従ひ、恩の流れを辿れるなり。而して十二節に「獨の子」云々とある、この「獨り」なる文字は、ルカの專用語にして、これはヤイロの娘の場合及びかの惡靈にとりつかれたる子を有てる人の場合（路八〇四十一、四十二、及九〇三十八）にも用ゐられたり。この「獨り」てふ事實が、人の子のやさしき御心を動かしたるものなるべく、従つて此の小さき文字は、機に合ひて愛らしく又趣味深き文字たるなり。あゝ我儕は、かゝるやさしき御心情の、イエスの中にあることを認めたり。願くはそをいよ

いよ學び得んことを。

余は今、四福音書に於て予が深く感じたることにして、本章と關係ある一問題、即ち自由といふことについて一言せざるべからず。自由とは、主が信仰に答へて、其御面より帕子の取去らるゝを許したまふことの自由をいふなり。昔或るイスラエルの王が、或人より癩病を癒さんことを求められたるとき、己が衣をさきていひけるは「我神ならんや争か殺すことをなし生すことをなしえん」（王下五〇七）と。然るに、ガラヤ人として嘲られたまへるイエスは、御自身の神性を意識したまひ、此意識に安住し、又此意識の明確なるがまゝに、忽ちかの人を顧みて單に「我心にかなへり潔くなれ」といひたまへり。元來信仰なるものが、幔を裂きたる時には、イスラエルの神の榮光は容易く照出づるを例とせり。本章に於てもその通り、異邦人の信仰は、天地の主たるイエスに申出でたり。その昔「光あれ」との一言を發したまひて「光あり」ま



た茲にて『一言を發し』たまひて、百夫の長の僕を癒すことを得る御方の前に、彼は申出でたるなり。されば此場合に於ても前例に倣ひ、又もや神の榮光は容易く照出でたりしなり。

抑々神、肉體を取りて來りたまへり、てふ事は、太陽の雲に隠れたるにも譬ふべし。彼が遜れる柔しき御姿は、太陽を隠す雲なり。又それは、神の御面に垂る、帕子の如し。雲の奥、帕子の内を透視する程の信仰ある人は、眞にイエスを知る人なり。かゝる信仰は、恰も御自身の神性を意識するの權利（此權利は彼が固有の權利なり）を、彼に捧ぐるに似たり。而して斯く意識したまふことこそ、實に彼の欣榮なれ。此信仰なくば、唯雲を瞻むのみ、帕子を視るのみ。斯の如き信仰を有する者に出遭ひたまふ場合の外は、其神性を意識することを自ら避けたまふ。あはれ神子にいます彼、御自身を空しくしたまへるなり。即ちその言ひたまひけるが如し『我善は汝に達せず』

（詩十六〇二。譯者曰く、これは英文の直譯なり。和譯聖書には「なんぢのほかにわが福祉はなし」とあれども、これは正しき譯にあらざるやう思はるゝにより、しばらく右の如く譯して主の教を俟つ）と。

次の問題は、バプテスマのヨハネが主の御許に使者を遣はしたる事にして、これは甚だ興味深くまた大いに理由ある事柄なりと信ず。

ヨハネは曾て、神の子御自身について證を爲したりしが、此點に於て彼は毫も疑を挿むところなかりき。然れども彼は、主の證人たるものゝ受くべき、總ての結果に對して、準備を爲さざりしやうに見受けらる。これ恰も、往日に於けるモーセの如し。モーセは、神の教役者にてあり、またイスラエルが曠野を通過する間、營の管理者たる職をも務めたりしが、遂に職責を盡くすに耐へずして、左の如き言を發するに至れり。『この總體の民は我が姪みし者ならんや。我が生みし者ならんや。然るに汝なんぞ我に慈父が乳哺子を抱くがごとくに彼等を懷に抱きて、汝が昔日かれらの先祖等』



に誓ひたまひし地に到れと言ひたまふや〔民十一〇十二〕と。榮光を保護すべかりし彼の手も、力なきをあらはすこととなり、他の七十人も亦、これと同様の運命に陥ることゝはなれり。然るにモーセは、此場合密かにエホバの御譴責を蒙りたりと雖も、エホバは他人の前に於ては、却てモーセを辯護したまふ。これ其後やがて、アロンとミリアムとがモーセを謗ることを恐れざりし故を以て、甚しく辱かしめられしことによりて知らるゝなり（民十一章十二章を熟讀せよ）。バプテスマのヨハネに於けるもまた全くこれと同様、彼は通常、人にあり勝の弱點を露はして、キリストに躓けり。彼は主の教役者たると同時に、また主の囚人たる者の當然遭ふべき困難と、負ふべき責任とに對して、一切の準備を爲さざりしが故に、恰もモーセの如く、遂に忍ぶこと能はざるやうになりぬ。モーセが、エホバのイスラエルの贖罪主たることを知りたる如く、ヨハネもまたイエスの神の子たることを知れりと雖も、營中の誓言の前者に取りて忍ぶこと能は

ざりし如く、ヘロデの備へたる獄と彼より蒙りたる害惡とは、後者の能く耐ふるところにあらざりき。茲に於てか、ヨハネもまた遂にモーセの如く、主の密なる責言を免かるゝことを得ざりき。『凡そ我が爲に躓かざる者は福なり』〔路七〇二十三〕。然れども人の前に於ては、彼も亦モーセの如く、惠によりて、神に喜ばるゝ者と認はされたり。『婦の生たる者の中いまだバプテスマのヨハネより大なる者は起らざりき』〔太十一〇十二〕。斯の如きは、主が常に取りたまふところの御手段なり。主が曠野の密なる場所にて、イスラエルを打ちたまふこと再三なりしと雖も、その敵の前には、彼は恰も、彼等の惡を見たまはざりし如き御方として立ちたまへり（民廿三〇廿二）。イスラエルの中に起りし問題は、大抵その敵のをらざりし時に、主と營との間にて決着せられたり。然れども彼等は、神を敬はざる人々の審判には與かることなかりしなり。聖徒も亦斯の如し。今は父の御審判の下にあるものなりと雖も、未來の審判は、彼等の爲に行は



るゝものにあらず。かの日には、彼等は何の懼もあらざるべきなり。  
以上、ヨハネの事によりて、讀むべき主の忠實と恩恵とは、明かにせられたり。  
主は如此、人々の前にてヨハネを辯護し、且つ讀めたまひたる後、更に彼等に向ひ、  
彼等がヨハネ及び主御自身を冷遇したる結果、如何なるものとなりたるかを、彼等に  
告げたまへり。偕てその告げたまへるところ如何。これ人なるものは、到底神の治療  
を加へたまふこと能はざる、受造物なりとのことにして、しかもこれはまた、我儕に  
も告げたまふものに外ならざるなり。神は種々の教務によりて、人を充分に試みたま  
ひたれど、何の應答もなかりき。神悲歌を爲したまへども人々には涙なく、神、笛き  
たまへども、人、躍らざりき。人の心は、神の指をもて調ふるに適せる樂器にあら  
ず。神之を試みたまへる時、此樂器は全くくるひてをりぬ。人の智力、熱心及び活動  
は、神以外の動力によりて、強請せられ又は煽動せらるゝ時に、顯はるゝものなれども、

彼は、神に對しては、全く無一物なり。神は、かの食ふことをなさず、飲むことをなさ  
ざる、バプテスマのヨハネによりては、嚴格なる調子にて調べ、また社交的なる人の  
子によりては、一層喜び深き調子にて、調べんとはなしたまへり。然れども、人の心  
は結局、右の如きものなりと證せられたり。何となれば「智慧は智慧の子に義とせら  
る」(路七〇卅五)とある通り、此等の試調は、樂人の妙手を試験したるものなればな  
り。最早此以上の試調は、爲し得らるべきにあらざるなり。「我儕笛ふけども爾曹踊ら  
ず悲歌をすれども爾曹哭す」(路七〇卅二)。

この嚴かなる教を聽きたる後、我儕は他の場所につれゆかる。即ちバリサイ人の家  
にして、主は食事に招かれて彼所に往きたまへり。これこの福音書に於て、主は高潔  
なる社交的の御方なればなり。即ち、人々と御言を交へたまはんが爲に、社交的の人  
にいますなり。是故に、我が既に述べたる如く、此福音書に於ては、主が人々の家に



於て、その人の何人たるを問はず、食に就きたまふ事、他の福音書に比して、一際多きを見る。そは、如此場合には、人の意くつろぎて、その在りのまゝを顯はすものなることを、主は知りたまへばなり。

このバリサイの人の家に於ける事件は、大に倫理的價值を有するものなり。正當に且實際に、我儕をイエスの御許に導くものは他なし、即ち我儕の罪惡なり。これ、この事件が、我儕に教ふる問題なり。單に教師として、若くは奇跡を行ふ御方としてのイエスを讀むる心を以て、其御前に出づることは、これ神の嘉したまふ仕方にあらずべし。我儕を實際に、神の子の御許に導くものは、唯だ是れ罪惡及び此罪惡を感じるること、是れなり。何となれば、彼は救主にいました、また如斯御方として、讀むべき神より、我儕の許に遣はされたまひたればなり。ニコデモが彼の許に来れるは、大なる仕事を爲したまふ御方として、彼を認識したるによる。然れどもニコデモは、再

び生るゝにあらざれば、即ちイエスに對する彼の考察を變更するにあらざれば、彼はイエスの御前に出づるに適當ならざりし者なり。此所に於けるバリサイ人もまた此の如し。このバリサイ人は、己を罪人として、イエスを招けるにあらず。イエスに關する何事かを見もし、聞きもしたるため、其心引つけられ、殊勝にもかく引つけられて、イエスを響應し奉れるなり。然るに、茲に別人ありて、全く異りたる途より、イエスの御許に來れり。この別人とは、即ち罪を犯せる市の婦にして、彼女は罪を犯したる者として、イエスの御許に來り、別にイエスを響應し奉れり。主の實際に着座せられたるは、バリサイ人の宴席ならで、彼女の宴席なり。この家の主人の費額多き響應が、左程重きを置かれざりしに引かへ、彼女の涙と、膏と接吻とこそは、これ實に神の子の賞翫したまへる響應なりけれ。

幸なる哉、イエスを斯く待遇せる罪人は幸なる哉。イエスを響應し、またイエスの



伴侶となれる者は實に罪人なりき。而してパリサイ人の饗宴と、彼の友人とは、遂にイエスの嘉みしたまふ所とならざりき。曠野なる此世に於て、神の子の爲に饗宴を張ることを得る者は、唯是れ彼をば救主なりと悟るところの信仰是なり。予は斯く福音書に於て、税吏レビの主に従へる後、直に其家に於て、主の爲に食を備へたるを見る。其故如何といふに、イエスは如此者を救はんが爲に、天より來りたまひたるにて、レビは即ち其一人なればなり。彼は税吏にして、其罪人たることは世人の周知する所、而してイエスは救主にいませり。茲に於てか、レビの信仰は門戸を開放して、イエスを招待し、其特有の御性格を認識して、彼を歓迎し奉れり。然れども之に反し、信仰なき者は、彼を謝絶するの外あらざりき。

この事を知りて信ずるは我儕の喜びなり。己が罪人なることを認めて、救主と共に出發する時に、我儕の旅の幸なること、眞に想像の外なり。これ我儕の罪は、我儕

をキリストに導き、キリストはまた我儕を父に導きたまへばなり。奇なる哉此の旅路。受造物の中に於て最も暗く、また最も遠き場所、若かも罪と死とは、此場所を支配する王なり。かゝる場所の數々を周く經過ぎて、愛と榮とが共に住ひて、永遠に輝くべしといふ、かの天の最も高き場所に達す。不思議なる旅路ならずや。天使には、天使の運動すべき清潔なる範圍あり。然れども彼等は決して、如上の路程を旅行したることなし。教會は罪人の住へる暗黒裡より出でて、神の妙なる光に入れるものにして、之に類するもの他にあることなし。唯だ、神の子の眞價を心に刻まれたる罪人のみ、之を了解することを得。而して我が見る所によれば、本章に於て、神の子の思によりて救はれたる、罪人の此の估價（神の子の價値を、心に刻まれたることを云ふ）は、終まで記憶せられたり。此婦は多くの愛を顯はせり。然れども此愛は、罪人たる彼に取りて、左程効能なかりき。これ主が終りに臨みて、彼女に『爾の信（爾の愛にちら



ず)爾を救へり安全にして往け』と曰ひたまへるにて知らるゝなり。こは大に慰めとなるものなれば、意に注むべきことなり。茲にて此の憐なる婦人の涙と膏とが、パリサイ人の認むる所となりたる如く、我儕の愛の果が、人々の前に讃めらるゝことあるべし。一杯の冷水も、キリストを愛するが爲に捧げられたらんには、其酬を失はざるべし。然れども此所なる罪人が、良心に感じたるものは、他なし唯是れ血と此の血に倚る信仰となり。我儕をしてかの寺人と共に、喜びて其路を往かしむるもの(使八〇三十九)又は此の憐なる婦人と共に、安全に往かしむるものは、愛にあらずして信仰なり。イエスに、否イエスにのみ、一切を委ね奉ることは、幸なる哉。靈魂は氣高くなれかし。歩は輝くほどに幸ひなれ、又清淨なれ。愛も亦成長せよ。而して經驗に於ては、ダビデやパウロのその如く、豊富なれ萬様なれ。然れども記憶せよ、イエスは、否イエスのみ、救主なることを。イエスは初め、安全に去らしめ給ふ。而してこ

の初の信用と喜とを、終りまで堅く保つべき事にこそ。

予はこのパリサイ人の家に於ける事件に付き、別に一問題を述べずして過ぎざるこ  
と能はざるなり。これ予は、一大苦戦の場所として、之を見ればなり。苦戦、これ  
はよくあることにて、肉と靈との苦戦なり。換言すれば、下婢と主婦との二人の妻  
(加四〇二十一以下参照)の苦戦は、この事件によりて説明せらるゝなり。

受造物は其犯罪の結果、例之、アダムのその如く、神より離れて獨立し、力なる  
ものを横領せり。此故に神は、人類を回復したまふに當り、御自身のみ唯一の主權者  
にいたしましたまふことと、従つて受造物の力は、遂に失敗に終るの外なきこととを、之に  
教へたまはざるを得ざるなり。而して法律と福音との、共に教ふる所は即ち是なり。  
法律は人を試みて、肉なるものを信用することの空しきを説き、福音は、神を顯示し  
て、神に倚ることの安全を教ふ。かの二人の妻の教ふる所、また之に同じ。ハガルは



肉に於て力ありしと雖も、其の子は嗣子たることを得ざりき。レヤは肉に於て力あり、權利ありしと雖も、其子は勝らずして長子權を失へり。ベニナは肉に於て力ありしと雖も、其子は一人として、悲惨壓迫の状態より、イスラエルを救出せしものなし。之に反し、一切の祝福と名譽とは、約束の子等の上に来れり。イサクは笑ひの主因となれり(創世二十二〇六)。而してアブラハム家の基礎を固うせしは彼なりき。ヨセフは世子の權を得たり。而して其生るゝや否やヤコブは、己が産業(故郷)に歸るべきことを曰へり(創三十三〇二十五)。これ『もし子ならば又後嗣たる』(羅八〇十七)を以てなり。サムエルは其母の心と口とに、歌を充たしたりしが、生長の後、イスラエルを塵より擧げ、敵の手より榮えを取戻し、而して營の中央に助の石(母前七〇十二)を起てたり。總て此等の事柄は、法律及び福音と同様『人は力をもて勝つべからざる』(母前二〇九)ことを我儕に教ふ。富める者は徒しく返され、勇者の弓は折られたり。然れども侍婢

は看顧られ、石女は七人を生めり。

これ神の我儕に賜ふ教訓にして、我儕の現在する此世、受造物が神と等しからんことを欲して、力を横領し、傲慢によりて神より遠かりたる此世に於て、これは必要な教訓にてあるなり。是故に神の常に告げ給ふところは是れなり。曰く『權勢に由らず能力に由らず我靈に由るなり』(亞四〇六)と。

これ我儕が現在する此世に於ける苦戦なり。肉なるもの若くは人より出づる者と、神若くは御靈より出づる者とは、常に相争へり。而して此争闘は、既に古代に於て發生し、今に至るまで繼續せり。前にも言へるかの二人の妻は、斷えず此事實を表はせるが、就中、アブラハムの場合に殊に然りとす。ハガルとサラとは一時偕に住みしが、常に不和にして相争へり。ヤコブの家族も亦然り。レヤは肉に屬ける權即ち長子の權を有したりしも、選擇と喜悅との目的はラケルなりき。彼等は一人の夫の妻にし



て、偕に住居せしと雖も、和合すること能はざりき。エルカナの家も亦之に同じ。ペニナはハガル及びレヤに等しく、ハンナはサラ及びラケルに等し。傲慢と人を怒らすこととは、前三者のものにして、心の悲の斷えざることは、後三者のものなりき。總て此等の光景によりて、肉は、御靈を迫害するといふ、主義は表示せられたり。ガラテヤの教會も亦之と同様の争闘に緣由りて、別の光景を顯出したりしが、各信者の心は何れも之と同様にして、前記の主義は終始一貫せり。家族、教會、心、此等は如何にして平和なり得べきか。主婦を力付くること、神の種を多く實らすこと、子たるもの、靈、子供らしき主義、又は我儕各自の中に、又我儕相互に、神聖なる自由を保つこと、唯それのみ。イサクを産め、イシマエルを逐ひ出せ、然らば分争することなき家に住むことを得ん。『イエスキリスト我儕を釋て自由を得させたり。是故に爾曹堅く立ちて復び奴隸の軛に繋がるゝ勿れ』(加五〇一)。

さて主は、當時のイスラエルを見たまふに、前記の有様に酷似たり。肉によりて生れし者、御靈によりて生れし者を迫害せり。罪に汚れたる人、税吏、自らに於ては弱く且失はれたる、此等の人々が、一切の愛と能力とを齎らせる、神の恩深き訪問に接しながらも、肉によりて有力なる、パリサイ人より嘲弄せられ、迫害せらる。視よ、前者は第二の石女、後者は第二のハガル及びペニナならずや。之れ肉と靈となり。下婢と主婦となり。本章に於ける、パリサイ人の家の事件は、右に對する一の標本たるべきなり。

希くは我儕の信仰をして、神の愛に正しく應へ得る程に、雄々しからしめよ。充分に且つ喜んで神を信用せんことは、これ神の愛の我儕に要求せらるゝところなり。信用を欠き又は信用することを躊躇は、神の愛の價値を殺ぐなり。希くはかゝる恐懼の靈、奴隸たる者の靈の除かれんことを。希くは我儕の心に在る眞正のサラをして



「婢と其子を追出せ」との叫聲を發せしめよ。勝を得るまで爾か叫ばしめよ。夫れ主の爲したまふことは、御自身に適ふ仕方に於て爲さるゝなり。昔、イスラエルのエヂプトを出づるや、彼等は自ら恥づる所ある者の如くして出でしにあらず、武器を以て身を装ひ、多くの貨財を携へ、神の軍隊として出で來りしなり。夫も彼等に向ひて吠ゆることなく、虚弱なる者一人として彼等の中にあらざりき。暗黒の權下を脱し、我儕の贖主に伴はれて出で來れる我儕罪人もまた之に等し。我儕は救主の御手に倚ること能はざる者の如く、恐懼と狐疑とを以て、歩むべき者にあらずして、神の御仕事に能力の大なることに於て無限なる如く、愛の深さに於てもまた測りがたき神の御仕事、明白に表彰せられ得るやうに歩むべきものなり。

いざ我等もバリサイ人の家を去らん。此憐れなる罪人に倣ひ、其處に集へる人々の冷評を意に介することなく、安然にして往けとの、主の御聲の樂しき反響をば、心の耳に確と留めつゝ、我等も去り往かん。血もて買はれし神の民は、斯くすることを可けれ。主の救ひを確かめ得て喜ぶの餘り、神は我等の味方なりと、人々に證しつゝ、我等は『勇者の食物』を以て、養はるゝ者なりと人々に示しつゝ、昔者イスラエルの埃及を出でしに倣ひ、我等も此處より出で往かん。

#### 第四 路加傳第八章

——沈黙の愛活動の愛——救済の恩に感激する結果——恩寵を證するに適當の人  
人——主の役務に二様の性質あり——豚を惜みてイエスを拒絶す——彼女の悲は彼女を主に導く——教會とイスラエルと世界との豫表

本章を學ばんとするに當り、顧みて前章の終りに於ける、憐れなる婦の場合を想ふに、彼女は罪を赦されたること若くは病を癒されたことを、心に感じた結果として、一人の御方に對して深厚なる愛情を顯はしたりしが、今こゝなる一群の婦等は、



獻心的に愛慕の心を生じて主に事へたり。さきの婦の場合には、隠れたる愛情の泉、キリストの恩の爲めに開かれて一時に湧出でたり。我が如き罪人をも、主は之を受容れたまへりと知りて、其心は振起されたり。イエスに心曳されて、一切を抛棄てたれば、パリサイ人の響應も眼に見えず、その嘲笑も耳に入らざりき。イエスを愛するの餘り、喜ぶの餘り、尙また禮拜したきの餘り、出來得る限りイエスに近寄らんとて、彼女は全力を注ぎたるなり。之と同じく此所なる婦等も、病を癒したまへるイエスの愛に感じて、心にイエスを慕ひ之に従ひ事へたり。喜びて真心より愛する其愛は、さきの婦よりは沈黙の姿にてあらはれ、此所なる婦等よりは、活動の態にてあらはれたり。後者の愛は、主の往きたまふ所へは何處へまでも従ひ往きて、御用の物は何なりとも出來得る限り獻げんとはなしけるなり。

二者の結ぶ果は各々異なれども、其幸なる事は相同じ。イエスは兩ながら之を知り

たまひて、前者の隠に流したる涙を受けたまふ如く、後者の露なる役事をもまた之を嘉したまふなり。

此の二者の美しさと雖も、その癒されたることを深く感じたる結果にてあらざりせば、あはれ汚さるゝことあるべし。如此感じたる結果の愛情ほど、また如此感じたる結果の役事ほど、純粹なるものはあらざらん。かの税吏が其胸を打ちたるは、悪事について深く感じたるが爲なるべし。これ其機に適ひて、素より正當のまた敬神の愛情にてありしなり。然れども、また此所なる二者の表はしたる愛情の美しさは如何。受容られたる事を深く感じたるよりして、湧出で流出で、涙となり、役事となり、愛となり而してまた獻身ともなりたる此愛情は、如何に人の心を引付けるものなるかな。それ何物か神の前に於て如此尊からん。然り、我等に取りてもまた如此尊きものはあらざるなり。然れども之に反して、己を満足させることを力め、高ぶれ



る意をもちて、人を軽んじ嘲り、然もなくば、靈魂の糧にならざる仕方にて智識のみを追求め、仲間争ひを爲すなど、總じてかゝる心さまの者は如何にも慘なるものなり。親愛なる讀者よ、此所にて聖靈の教へらるゝ、またその喜びたまふ此手本を、御同様習ふべきものならずや。

本章より十章までに、初は主は十二人の弟子、其次は七十人の弟子が、引續き教を宣ぶる爲に邑々を周遊こと記さる(八〇一、九〇一、十〇一)。斯の如く教の廣く宣べらるることは、路加傳の本旨に副へることなり。而して尙ほ引續き、其光の照らざる所なく、其慈愛の及ぼさざる所なき迄に、周く各域各郷を巡りたまへる由記されたり。斯の如く巡らせたまふ時に、主は一群の人々を随へたまへり。此人々は惡鬼を逐出され、又は弱きよりして強くせられたるなど、主の恩寵を證しする爲には、至極適當なる人々なりけり。是れ恰も、將來主が權威を以て來りたまふ時に、主の榮光を反射す

に適當なる一群を召連れたまふ場合に同じ(黙十九〇十四)。

次に記されたるは、種蒔の譬なるが、これも馬太にも馬可にもあることにて、一般の性質や目論見は同じなれども、茲にては、神の裁判をイスラエルに當てはめんが爲に、直接イザヤ書を引照せられざる所を見れば、イスラエルに對しては左程注意せられざる様なり。是亦此傳に於ける主の旨に副へるものなり。

本章にガダラ人のこと、血漏を患へる婦のこと及びヤイロの女のこと記されあるが、これは馬可と同様の方法によりて配置せられたり。

以上の場合及び之と同様、主の能力と憫恤とのあらはれたる場合に於て、主の御役務には常に二つの性質あり。即ち、主は惡魔を審きたまふと雖も、罪人をば決して審きたまはざること是なり。主は、惡魔の破壊的能力の跟趾を取り去りたまふと共に、御自身の贖罪能力の印影を、罪人の上に留め置きたまふ。盲者は見、跛者は歩み、癩病



は潔まり又死者の蘇生りたる時など、何れも悪魔の能力は審かれ、罪人は祝福を蒙りて、如上二つの證據は立てられたり。然れば、悪魔は主に遭ひて、唯ふるひおのゝくのみなるに反し、信する罪人は、常に祝福を受け喜びて去り往くなり。主が弟子等に向つて「信仰うすき者よ何ぞ慌るゝや」と言ひたまへる時の如く、人を罵りたまふやうに見ゆることあるも、實は然るにあらずして、是の狐疑逡巡を警めたまへるなり。之れ恰も、モーセが出で、埃及人を搏てるも、彼れ自身がイスラエル人に冷遇せられたる時に當りては、單獨にて遁れ去りて、イスラエル人の頭髮にだも觸るゝことをせざりしに同じ（出二〇）。サムソンも亦斯の如く、彼れ、ペリシテ人を狙ひをりしに似ず、ユダの人々が彼に敵せし時に至りては、彼は恰も小兒の如く弱かりしなり（士十五〇）。三。神の子は、悪魔と其工とを審きたまへども、罪人に向つては即ち「我來りしは世を審かんがために非ず」と言ひ、又「人の子は人の命を滅すために來らず。惟之を救ふ爲なり」と言ひたまへり（約十二〇四七、路九〇五十六）。

ガダラに於ける主の御役務も亦斯の如し。それガダラの地は、ユダ支族の所屬にして、潔められたる地なり。此地も亦かの、神が常に、御目を留めて守りたまふ土地の一部分なりけり（申十二）。然るに、悪鬼は夙に此所に侵入して之を汚したりしが、今や群をなして此所に住み、其力は限なく顯はれり。實にエホバの選びたまへる場所は、今やレギオンと豚との住家となれるなり。かの勇士の住家は即ち是なり。然れども、神の子は御自身に専屬する工を成功んため、即ち捕虜を解放し、死の權能を壞たんが爲めに、尙ほ優りたるの勇士として、此住家に打入りたまへるなり。然れども、豚を牧ふ者どもは之を希はず。彼等は、此工を以て自身に取りて有害なるものとなし、イエスに向つて御立退を請求せり。眞に怖るべき哉。全福音書歴史を通じて、斯の如くサタンの暗ましたる、又汚したる地方は他にあることなし。かの



勇士よりも尙ほ優りたるこの勇士が、斯の如く恩恵と能力とを顯はしたまへるに、彼等は之を望まずして、却て神の子の授けたまふ利益を以て、一群の豚と交換せんことを希へるなり。不信仰も茲に至りては眞に怖るべきものなり。

ユダヤ人の宰にて瀕死の女を有てる人、主に來りたまはんことを願ひけるに、主は其願を叶へて、御自身の復活なり生命なることを證せん爲に、彼の家に赴かんとしてたまへる途中、血漏を患へる一個の婦、群衆に紛れて來り、信仰に由り主に押りて、其御通路を妨げたり。此婦の病は癩病の一種にして、不潔物其身體より流出づるものにて、如何なる名醫と雖も到底救済の途なきなり。此婦治療の爲に産を傾けたりしが、今やイエスに唯だ押ることにより、其多年の望は叶へり。此時群衆は周圍より主に擁擠て、混雜を極めたりしにも拘らず、此事は人々の悪しきが爲にあらず、又其入用を求むる爲にもあらざりしが故に、主は何とも感じたまはざりしが、此婦は主の徳

を信じ、自分の入用を深く感じて押りたるにより、又彼は汚れたる者なりしにより、主は忽ち之を感じたまへり。彼の悲は彼を主に導き、主が彼を知りたまへるは、彼を癒したまへるに由るものにて、是即ち此兩者互に相識るに至れる所以の本質にして又其基礎なり。而して今や神の子と癒されたる罪人とは、斯の如く群衆の中にて出遭ひたるが、此婦より衆人を觀る時は、主の外は總て之れ無關係の他人にして、而して主より衆人を觀る時は、此婦の外は之れ又總て無關係の他人なりしなり。

以上の事柄によりて、我等は多くの慰めを蒙るなり。然るに尙ほ此外、此所にて主の御道筋は、頗る意味あるものなり。即ち神の子が御在世當時より、將來に向つて取りたまふべき、御道筋の順序を豫表したるものにて、此婦は恰も現時代に於ける教會の如く、又ヤイロの女は末日に於けるイスラエルの如し。末日に於て、主は恰も枯れたる骨を活かしたまふ如くに(結三十七〇一—十三參照)イスラエルを回復したまふことにより



て、御自身の復活たり、生命たるの能力を表はしたまふべき次第なるが、今や其途中に於て、衆人の中にて獨り己が不幸の爲に呻吟する婦（教會）に對して、厚き同情を寄せたまへるなり。

斯の如く八章は主が役務の爲に出發したまふことより始まり、教會とイスラエルをば其御心勞の果として示し、同時にガダラは主が曾て勞苦を嘗めたまへる此世の有様を表示し、而して主の御心勞は主の頌譽となり、世は審かれて、主に依り頼む罪人が慰藉を受くることを以て局を結ぶなり。

### 第五 路加傳第九章第一節乃至第五十節

——十二弟子役務並にヨハネ殉教問題に關する本傳の特徴——山上の變貌は聖徒身分の保證なり——榮光なるものは十字架の結べる果なり——肉なるものは榮光の前に置かるゝさへ不適當なり——梯子の上の秘密發表せらる——此變貌は前古

未曾有の大事件なり而も尙ほ將來顯現せらるべき基督の宇宙的榮光の一斑に過ぎず——ステパノの變貌——贖罪事業の讚美せらるべき範圍は廣大

本章の始めに、十二弟子の遣はさるゝ事記されあり。然れども、主は此處にて馬太傳に於けるが如く、十二弟子の役務の範圍を『イスラエルの迷へる羊』のみに制限せられざりしは、是れ即ち馬太傳と路加傳とが各其主意を異にする所以なり。

次に記されたるヘロデが良心を働かす事は、馬太、馬可に記されたる事に比して蓋し稍詳細なり。而して此事は路加二十三章にも記されたり。之に反して、バプテスマのヨハネの死について茲に詳ならずは、是れユダヤ人の背教の歴史に關する事柄なるが故なり。以上何れも路加傳の本旨に適へり。

さてイスラエルの不信仰は、今や證據充分なり。（此事を順序を逐うて詳かに記したるは馬太なり）。茲に於てか、山上にて主の御姿の變ること記さる。而してこれは、



馬太馬可等に比し余程異なる點あり。昔者エホバの發したまへる命詔に依れば、シオンは地上に於ける神政の主權者所在地なり。然れどもイスラエルは其王を受けず、ナザレのイエスが世を照らすの光たりし事、又彼等自身の榮たりし事をば認めざりき。茲を以て現代に於ては、此世界はイエスの御領地とならず。彼は王冠を戴きたまふ代りに、十字架を負ふの時を待ちたまひき。然りと雖も、縱し此世界は主の御領地とならざりしにせよ、今地上に於て、主が斯く棄てられたる者となりてをりたまふ間に、天は彼に對して又彼の集めたまふ聖徒に對して開けたり。而して天の斯く開けたるは、天の榮は、彼等聖徒の所有たるに相違なき事を保證せんが爲にてありしなり。

是れ實に未曾有の事なり。是れ地より直に天に達したるの時なり。斯の如く神の秘密は發表せられ、天のエルサレムの門は暫時彼等の目前に開かれたり。モーセとエリヤとは、イエスと共に榮の中に顯はれ、彼等は之を目撃して榮の友、榮の證人の彼所に

をるを認めき。將來千年王國に於ては、恙の新婦は恰も今此榮の、山を照せる如くに天より降り、而して救を受けたる諸國民は此光によりて歩まん(黙二十一〇二、十、廿四)。

三十七節によりて思ふに、茲なる主の御變貌は、夜中の出來事にてありしならんと予は信するなり。天の榮に照らさるゝ場所は、神自ら光となりたまふが故に、日をも月をも要することなし。然れば此山も亦、夜中輝ける主の御身體の光に照されたりしなり(之と同様殿の中にある『至聖所』は天の處の豫表なるが、其處は燈火にあらずして神の榮によりて照らされたりしなり)。

又此榮の中に顯はれたる天の賓旅等は、イエスの世を逝りたまふことを語り合へり。イエスの死は永遠の紀念となりて、榮の中にて讀めたへらるべき問題なるが故に、彼等の斯く語り合へるは最も機に適へり。贖はれたる者、天使其他總ての造られたる者は、悉くイエスの死を問題として感謝すべし(黙五〇)。何となれば、榮其物は已



に十字架に對して負へるところあればなり。即ちかのヨベルのラツバの鳴り響きたるは、贖罪の日に限るものにして、安息なるものは、神の恙の屠られたること、即ちイエスの世を逝りたまへることに基きたりしに同じ(利二十五〇)。

尙又、弟子等が主と共に此山に登れる時、主は榮の輝くまで祈りてをりたまへるにも拘らず、かの智き童女等の假寝したりし如く、弟子等も亦此處にて寝りたり。此の登山は實は弟子等に取りて、少しく不相應のものなりしなり。即ち本性の人に取ては稍や難きに過ぎたる旅行なりけるを以て、肉なるものゝ弱きことは露はれたり。然れども彼等寤めて「師よ此に居るは善し」と言へりしを以て觀れば、其心の有様は正しかりしなり。

やがて「至大なる榮光」(彼後一〇十七)顯はれて、聖所と至聖所とを區別せり。即ち雲來りて輝ける人々を蓋ひて其中に入らしめ、弟子等は外に置かれたり。教會はキリスト

と共に榮を受け、イスラエル又は救ひを蒙りたる諸國民は、此の榮の光によりて歩むなり。かく此雲は榮の人々と地上の人民とを區別したるなり。ペテルに於けるヤコブを見るに、彼はたゞ彼處に立てる梯子の下に在りて、エホバの御聲を聽けるに過ぎずして、梯子の上の如何なるかに付ては何をも知らざりき。今や本章に於て、梯子の上の秘密は發表せられ、輝ける家族は榮の中に、エホバたるイエスと共に居らしめらるるなり。

此示現は、將來或は天に在り或は地に在る萬物を、キリストに歸せしめんとの神の御目論見の前提たるなり(弗一〇十)。如何に幸なる併かも亦不思議なる示現なる哉。かくる示現は、古來未だ曾て有らざりき。アブラハム、ヤコブ、モーセ等を始めとし、エリヤ、エリシヤ、イザヤ、ダニエル等に至るまで、或は直接神を拜し、或は神と交へ、又は神より啓示を蒙る等、種々なる方法にて、著しき祝福の顯はれたる實例



甚多く、殊にエリヤの如きは、エリシヤの目前にて天に取り上げられたる人にて、之れは榮の人を其今居る場所に導きたるものなれば、祝福の最も顯著なる一例たりしなり。然れども、此等は其の幸なることに於て、何れも本章の示現には遠く及ばざるものなり。何となれば、エリヤの場合の如きすら、單に人を榮の中に導く途中の有様を示したるに過ぎざれども、本章に在りては、榮の人々が安らかに、其住家に居る状態を示されたるものなればなり。

本章に於ける示現の幸なることは、夫れ斯の如しと雖も、尙ほ之に優りたるものは、使徒行傳七章に於けるステパノの面貌の變りたることなり。路加傳九章に於ては、弟子等が他の人々の輝ける様を見たるに止まれども、使徒行傳七章に在りては、ステパノ自ら輝けるなり（徒六〇十五參照）。榮が山の上まで降り來りたるにあらずして、將にステパノを迎へんとて待ち居たまふ主御自身を見させんが爲に、天自ら開けたるなり。而

して此處にて彼の物語の中にある、古の賓旅又苦を受けたる人々は、是れ正に『榮光の神』に導かれて『神の榮光』に達したる人々にして、ステパノ自身も亦實に其一人なりけり（徒七〇二、五十五）。

斯の如くステパノに對しても、又はペテロ、ヤコブ及びヨハネに對しても、天の秘密は露はされ、而して教會は正に梯子の上に、神の子御自身の榮の中にあるものとして示されたり。贖罪の工の絶妙秀美は、單に天に於てのみ稱讚せらるべきものにあらず、又單に地に於てのみ稱讚せらるべきものにあらず、宜しく天地舉りて之を稱讚すべきなり。此の工によりて、神の愛と能とは殘る限なく顯はれたるが故に、廣く天地に知れ亘るべきものたるなり。教會の選ばれたるは之れを天に證せんがためにして、イステルエルの召されたるは之を地に證せんがためなり。而して此天の證人は、今や本章に於て、山の上に暫時顯はれたり。ア、是れ何等の恩ぞ、何等の召ぞ。而して之れ



ぞ神の御目論見なる。否神ならでは爲すこと能はざる御目論見なり。罪人ども召し出されて、神の子の如く愛せられ、神の子と共に榮を受け、神の子と同じ住家に住み、而して神の子と同じ位に座せしめらる。無限の愛にあらざれば、如何んぞ如此計畫を立つることを得ん。ア、我等の心は未だ殆んど、神の徳と神の榮とを知らざるほどに惨れなるもの哉。

## 第四段 基督のエルサレムへの御旅行

### 第一 路加傳第九章第五十一節乃至末節

——此御旅行の初期——世人は主の御昇天を以て至當の要求と認むべきや如何！  
 ——世人の輕侮を堪忍びて天に昇りたまはん御趣意なり——榮められたるに適ふ途を知り棄てられたるに處する途を知りたまふ——聖徒の新地位を獲たるは主の棄てられたまへるに由る——棄てられたる御方として我等の心魂に語りたまふ

主はガリラヤに於ては、幾分か形式的に其教務を切り上げたまひて、エルサレムへの旅路に上りたまふ。此御旅路の初期に起れる事件を記せるは、唯路加のみなり。而して、路加が事件を倫理的に配置せることに關し、此所にて多少注目すべき點あり。或人此節(五十四—五十六)に註して『歴史的記事は前節(即ち弟子等に隨伴せざる人を



ヨハネが咎めたるを主の責めたまへる事との關係を示す爲に記されたるもの、如し』と曰へり。前の場合はキリストの爲に熱心なるよりして、弟子等は已れに随伴せざる者の所行を咎め、また後の場合は同様の熱心を以て、彼等は不信者を滅ぼさんとしたるものなり。然れどもキリストは、彼を責めたまへる如く、また此をも責めたまへり。これ本章に於ける路加の物語の倫理的順序なりと予は信ず。而も此記事は、主の特別な御道筋を我等に紹介するものなり。

主を此旅路に導きたるものは、さきの山上の變貌事件ならん。然れども、其然ると否とに拘らず、主は此所にて此旅路が、御自身を榮光に導くものなることを感じたまひて、旅行の準備を調へをりたまふを見奉る。『天に昇るの期』到れり、即ち榮光に入りたまふべき時は來れり。此榮光に應はしき道を備へさせんが爲に、弟子等を先きに遣はしたまへるは、これ此時期到來を意識したまへるによるものなるべし。エルサレ

ムより天への御道筋に對しては、神の備へたまへる乗輿御迎へ申すべしと雖も（路二十四〇五十一）、主が現に居たまふ此村より、エルサレムまで御道筋を備ふることは、これ宜しく人の子等がなすべきの事なり。主は後日、イスラエルがシオンに於ける彼の王位を（路十九〇廿八）認むるや否やを試みたまへる如く、此處にても亦あたかも、世が彼の天に昇るべき要求を、至當と認むるや否やを試みたまへるに似たり。然れども世は彼を知らず、イスラエルも亦彼を受けざりき。此所にてサマリヤ人の態度にあらはるゝ如く、世は主の御要求に對して、何のそなふる所もなかりき。地は主の天の榮に心を留めざりき。不信なる世は精神的に『禿首よのぼれ禿頭よのぼれ』（王下二〇二三）と言ひて、再び主をあざけりたり。

此の場合、主の意向を知れる弟子等は、主を以てあたかも第二のエリヤが、イスラエルより御迎へにさし立てたる乗輿を、待ちたまふが如きものなりとなし、先にエリ



ヤがサマリヤ人の侮辱を憤りて、彼の五十人の長と五十人とに對してなしたりし如く、主にも亦かくの如くなさしめんとせり。然れども、今や人の子の途は之と異なり、世をさばきて榮光に達したまふにはあらずして、御自身のかなしみを堪へ忍びて、榮光に到らんとしたまふなり。主は「之を釋」(路二十二〇五十一)たまふが故に、弟子等の行爲を差止め、人々のあざけりをあまんじて受け、他の村に入りたまふ。而して終に、其道筋に備をさせたまふにはあらずして、棄てられたる神のキリストとして旅路に進みたまへり。

如此有様にて、主は其旅路をつゞけたまふ。旅路の始めに於けるが如く、今は其御心に榮の事を思ひたまはず。サマリヤ人は共に計りて、主をむかへず、御道筋を備へず、爲に主をして、御道筋を變更するの止むなきに至らしめたり。而も主は、此變へられたる道筋をば、嘲けられたる者、棄てられたる者として進み往きたまふ。

親愛なる讀者よ、使徒パウロが「貧賤に居るの道を知り、また富厚に居るの道をしり、飽くことも飢ること、豊むことも、歉くことも」(腓四〇十二)熟練したりし事により、恩のほめられたりしならんには、ましてほむべき我等の主に於て、此熟練の完全なりしを見ずや。主は或時は、みちたれる榮に適ひて行ふの道を知り、又或時は、棄てられたる人の子として行ふの道を知りたまふ。サマリヤ人が嘲笑を以て備へたる途を歩きたまふに當り、主には絶えて不自然の御舉動なく、又絶えて怨きたまふこともなし。尊き哉完全なる教師よ、讀むべき哉恩深き救主よ。

斯の如く棄てられたまへる時に、主の御許に來れる人々あり。我等之によりて教訓を受く。此の中の二人は、馬太傳の八章にも記されたれども、夫れと此とは倫理的關係を異にせり。

茲にて主の教へたまへる事は、何れも、地上にて其棄てられたまへる現在の地位を、



十分認識したまへるに基くものなり。抑も聖徒が、新なる地位を得、新なる義務を負ひ、又新なる愛情を有する所以のものは、主の棄てられたまへるに由るものなり。我等は宜しく、此新地位新義務、及び新愛情に關する本章の教訓を熟慮すべく、又爾することにより、我等が主の有とならんが爲に、幾何の費額の支拂はれたるものなるかを、計算することを得ん。聖徒をして茲に至らしめたるは、唯だ主が世より全く棄てられたまへることのみ是れよるものなれば、棄てられたまへる主を識る者は、やがて聖徒の新地位等をも確知することを得ん。營の外に出で、神の子の御許に往く者は『後を顧る』べからず。又『肉體に依りて』人を知るべからざるものなり。而して、斯の如き靈狀を以て主の前に立つ時のみ、我等は正しく主を識り奉る者なり。

以上は、我が神的教師が『人に嘲けられ棄てられ』たまへる其現在の地位よりして、我等の心魂に語りたまへる聖肅なる御教訓なりとす。而して主は、悲みたまひながら

も、尙ほ更に我等に教へたまふことは、我等が此姦惡なる世を彼所此所と遍歴する時に、主に隨行し奉りて、主の思考を辨へんこと是なり。

〔著者註。此所なる三人の中、最後の一人に對する主の御答は、エリシヤの召を引用せられたるものゝ如し。弟子等、先きにエリヤを引用したるとき、主は自然エリシヤの召の事を思ひたまへるなるべし。主が犂を取る人のことを語りたまへるは、蓋しエリシヤの歴史の引用せられしものならん(王上十九〇二十二)〕

## 第二 路加傳第十章

——七十人の復命に對する御訓戒——逆境に立ちて尙喜び得る秘義——完全なる神完全なる人——間に優る答——彼の要する唯一のものは實に此愛——法律に不朽の效力を附與す——津ぐるマルタ受くるマリヤ——人性の奥に潜める神性の光輝——與ふる主義



七十人の者主より遣はされて、毎戸毎市に神より出づる平和の福音を宣傳へ、若干の効果を收め、意氣揚々として歸來り、其顛末を復命せり（二一—二七）。此時主は、左の御主意を以て、彼等を訓戒したまへり。我れ汝等にサタンを制禦するの權力を授けたり、茲に相應の効果を收め得たるを喜ぶは、素より然かあるべきことなり、然れども汝等の喜樂を其處に止むべからず、汝等の心を上に向けよ、御父が汝等の名を御意に注めさせたまふ事を思へ、これは汝等が効果を收め得たるよりも一層優りたる事なり、と（一八—二十）。

ユダヤの諸市の不信仰を歎じたまへるイエスが、乍ち『心に喜び』たまへるは亦奇ならずや（二十一）。逆境に立ちて尙喜び得るの秘義如何。主は周圍の不幸を憐れに思召しながらも、其御心は直に上に向ふなり。天地の主なる御父、此天地萬物を御子に賜へる尊くして幸なる御父の御性格、さては『赤子』どもの名を天の御書に録し、彼等をし

て天の家族たるの特典を荷はしめたる其奇しき御計畫、それらに向てイエスの御心は展けたり。彼の御喜の秘義、實に此處に存す。此秘義を彼等に悟らせんとて、主は斯く彼等を教へたまひしなり（廿一—廿四）。

主が斯く天の事柄を思ひ繞らし、喜びて居りたまへる時、突然一人の法律家出て來り、一箇條の質問を發したり（廿五—廿七）。彼は天の事を思ふ人、此は地の事を思ふ人なり。イエスの思考は、天の高さが如く高しと雖も、彼は亦地の事のみを思ひて、此低き思考に閉込めらるゝ人に同情することを忘れたまはず。今此法律家の突飛なる面白からざる質問に遭ひても、御心の自由は毫も妨げらるゝ事なく、忍びて之に應へたまふ。何人も信仰だに有らば、イエスの人格より照出づる神性の輝を認め得べかりしことは既に述べたり。然れども人間の必需と無知とより起る叫びが、彼の御前に達する時には、溫容を以て臨み、機に適ひて之を教へ之を充たしたまひし事、亦以て



彼の人性の尊さをも知るに足らん。信仰の眼より視れば、神の大性格は、悉くイエスの御身に於て現はれたり。神の徳如何に廣大なるも、イエスに於て之を現はし得ずと云ふことなし。神の能力従つて大なれば、イエスの之を體現し得る可能性も亦従つて大なり。イエスの人格も亦大なる哉。夫れ然り。然れども、イエスの大なりと云ふは、彼が小事に無頓着なりとの意にはあらず。人間の要求の如何に小なりし場合と雖、彼は決して之を輕んじたまひたることなし。人間の發する質問の如何に愚劣なりし時にも、彼は絶えて之を嘲りたまひたることなし。之を要するに、彼は神を體現することに於ても、人の要求を充足したまふことに於ても、共に間然する所なかりしなり。

さて、此法律家の間に答へて、主の語りたまへるサマリヤ人の譬は、是れ此傳の特徴なり。此物語の要點は、此法律家の隣人の誰なるかを之に示すにあれども、主が恒に爲したまふ如く、此質問を機會として、福音の原理を説示せらるべきこととなりた

るを以て、此物語は少なからず擴大せられたり。斯かる談話の方式は、各時代に於て神の取りたまふところのものにて、全然神に適へる方式なり。神は常に我等の失ひたるものを回復したまふに止まらず、此完全なる回復に添へて、一層優りたる幸福を持來したまふ。主が此處なる物語の方式も亦是れに外ならず。質問者への答辯の要領は、實に主の説示せられたる大原理の中に含まるゝなり。汝の隣を愛すべしと云ふ法律の條文に關する問は、神の子の福音を以て答へられたり。かの被害者を濟ひ得る者は、かのサマリヤ人の外には、之れ無かりし如く、罪人の要求を充足するものは、實に此神の子の福音の外には之れ有らざるなり。

此處なる主の御物語の中に、聖地の汚されて居る事の意味あり。抑々法律の爲し得る事は、かの加害者を搜索し、之に對して目にて目、齒にて齒、手にて手と云ふが如く、被害者の被りたる損害の賠償を強請するに過ぎず。法律に従つて祭壇に事ふる人



は、其職務の爲に亦他を顧るの暇なし。此土地の人に非ざる彼の旅人こそ、實に此被害者を顧みる人なりけれ。あゝかの被害者にも等しかりし我等、何人の救済をも得ること能はずして、氣息奄々たりし時に當り、神は御親ら我等を訪ね愛の勞を取らずしでは止みたまはざりしなり。神殿の役事は、汚れたる人を神殿に入るゝに由なし。人の性行は汚れたり。人の心は神を迎へ奉るべき至聖所にあらず。己が血に汚されて、不淨の地に倒れたる彼は、唯救を待つの外なきなり。人は剽悍にして殘忍なる敵の餌となりたり。斯かる人を訪ねて、費用を惜しまず介抱する程の愛、世に有りとすれば、彼の要する唯一のものは實に此愛なり。然れども斯かる愛の有無如何。我等は福音の啓示する神の御子に於て此愛を發見したり。法律に従へば、神は至聖所に在して、不淨は除かるべき次第なるが、福音に於ては、神自ら不淨の場所に降り給ひて、諸の不淨に接したまへども、之に汚されたまふことなく、被害者の血を拭ひて、之に油を塗

りたまへり（結十六〇参照）。かのサマリヤ人、馬より下りて被害者を介抱せし如く、高き御方卑くなりたまひ、富める御方我等を富まさん爲に貧くなりたまへり。尙是に止まらず、主は我等と共に居りたまふ時も、又居りたまはざる時も、永遠に我等より御心を放ちたまはざること、猶かのサマリヤ人が、其不在中の看護方を館主に命じ、再び來らん時、其費額を償ふべしと曰へりしが如くなり。

汝の隣を愛すべしと云ふ法律の條文を遵奉せし者は、唯イエス御一人なり。『汝も往きて其如く爲よ』との仰せの如く、法律の要求に應へんことを希ふ者は、宜しくイエスの御足跡をたどるべし。總じて法律に由りて義とせられんことを求むる者は、此法律家の如く、正に法律其ものゝ價值を低減し、又其意義を狭むるものに外ならず。『我隣とは誰なる乎』と曰へりし彼は、蓋し隣を愛することの眞意に付いて、教訓を受くべしとは豫期せざりしならん。元來法律なるものは、人の思想の限界に比して、餘りに



高尚に過ぎたり。何人と雖もイエスの御生涯の意義を味ひたる後にあらざれば「汝心を盡し……主なる汝の神を愛し、亦己の如く汝の隣を愛すべし」と云ふ條文の價値を認むること能はざらん。此法律家は、法律を遵奉せんことを力めて、而してイエスを排斥したり。法律の條項をして空文に終らしめず、却て不朽の效力を之に附與したる者は、唯イエス御一人にてありし事、是れ彼の學ばざるべからざる所なりしなり。

サマリヤ人の譬に於て、恩寵の妙趣を教へしこと、路加傳の特徴なりし如く、次に二人の姉妹に關する物語(三十八以下)に於て、福音の一大原理を述ぶること、亦同じく此傳の特徴なり。

此處なる家はマルタの家なり。彼女は此處に主を招待し、心を盡して主を待遇し奉らんとす。主は亦暫し御疲れを息めん爲に、斯く訪ひたまへるものなるべし。主はかのサマリヤ人の如く、自ら徒歩するとも、他人をば馬に乗せたまふことの御方なる

こと、素よりマルタの熟知するところなり。而して主を敬愛し奉る彼女にして、其御疲れの程を推し參らせては、如何でか此接待に全力を盡さずして止まん。然るにマリヤには別に主を迎へ奉るべき家としては無く、其現在の境遇より言へば、彼女も主の如く此土地に家を有たぬ旅人なり。然りながら、彼女は心の至聖所を開けり。其遜れる心をば、殿として主に捧げ奉りぬ。主の御疲を推し參らすることに於ては、彼女もマルタと異なる所なしと雖、彼女は御疲にも打勝ちたまふことを得べき主の充實せる御徳を認めたり。然れば主の爲に手足の勞を取る代りに、主の御言に耳を傾けぬ。此二者の異なる所は、マルタが主の御疲を息め奉らんとて、捧ぐる地位に立ちたるに反し、マリヤが御疲にも打勝ちたまふべき主の充實せる御徳を認めて、受くる地位に立ちたるに在り。

此二者に對する御取扱振りに由りてこそ、神の子の御徳は顯はれたれ。マルタが一



意専心、主をねぎらひ參らせんとの赤心は、素より主の嘉納したまふ所なり。然れども彼女がマリヤの舉動を難するやうに成りては、彼女は教戒を要する者と爲る。即ちマリヤの信仰は、彼女の全力を盡したる待遇にも遙かに優りて、主を慰め奉るものなりとなり。御疲を充分拜察したる上にて、尙其御言葉を謹聽せんと希ふの心は、イエスの人性の奥に潜める神性の光輝を認めたるに由らずんばならず。換言すれば、疲れて居りたまふ時にも、尙他人を養ひ潤し得る御方なるを認めたるに由るなり。斯る信仰は、神の御子に其本然の頌榮を歸し奉るものに外ならず。マリヤは此信仰の秘義を解し得たりしか。主が曾てヤコブの井戸の傍に坐したまへる時、活ける水を與ふる爲には、御自身の饑渴をも忘れたまひたり。今やマリヤは、此活ける水の井戸の傍に坐して、疲れて居りたまへる時にも、尙ほ滾々として湧き出づる活ける水を掬せんとはなしけるなり。

力に於ても善に於ても、共に最上位に在したまふ我神は、我等が彼に對して負債ある者たらんことを望みたまふ。彼の充實せる御徳を我等が徹底的に感知せんことは、我等の働よりも彼の前に貴きなり。彼は總ての受造物より徴收する權利を有したまふにも拘らず、其我等に對して最も望みたまふ事は、彼の愛に純全に信賴して、彼に在る寶を引出さん事なり。總じて我等が彼を頌榮する事の中にて、最高の頌榮に値するものは、彼に信賴し奉る事なり。彼の最高の御徳は、與ふる事、祝する事又無限の充實よりして注ぎ出す事なり。法律に従へば、彼は我等より受くる御方、福音に於ては、與ふる御方なり。即ち「受くるよりも與ふるは幸なり」と仰せたまひし如し。與ふる主義なる哉。與ふる主義なる哉。神の欣榮、神の頌榮は、唯夫れ不斷に永久に與ふる事是なり。



## 第三 路加傳第十一章

——所謂主の祈禱に關する教訓は誰に適用せらるべきか——主の祈禱と教會の祈禱との區別——切に請はゞなどか賜はらざらん——痛快なる辯駁——馬太と路加との異點——イエスの教務の有力なる一例

法律は、原則として、祈禱を要求せず。是れ祈禱は、自己の弱きを感ずる所よりして、神に倚る心を表示するものなるに反し、法律は、人に自力を用ゐんことを要求するものなればなり。但し申命記廿一及廿六の兩章に、祈禱のこと記しあるは例外として見るを可とす。法律より一步を先んずべき使命を受けたるヨハネが、自己の地位相當の祈禱を其弟子に教へたる如く、イエスも亦此處にて、當時その弟子等の立ちたる地位に適應する祈禱の規範を之に授けたまへり（二—四）。然れば此祈禱は、當時弟子等の置かれたる地位に對しては、頗る緊要適切のものなりしこと申すまでもなし。然れ

ども、此祈禱を教會に適用するは、當を得たるものに非ず。イエスは當時未だ我等の祭司長となりたまはず、天の至聖所にも入りたまはず、従つて亦未だ聖靈も降下せられざりしなり。此故に、『なんぢら今まで我名によりて求めたることなし』（約十六〇廿四）と仰せられし如く、イエスの御名は此祈禱の中に見えず。而して此後に至りて『其日なんぢら我名に託りて求めん』（同〇二十六）と仰せられしに依りて見れば、イエスは將來祈禱の性質にも、亦一段の進歩を來すべき事を豫告せられしなり。果して後年、使徒等が聖徒の爲に捧げたる祈禱は、其思想に於ても亦其要求に於ても、此處なる祈禱に比し、遙かに優越せるものあるを見る。

斯の如く、此處なる祈禱の規範は、イエスの御在世當時、即ちイエスの昇天以前、聖靈の降下以前の如き状態に於ける聖徒の爲には、完全なる規範たるに相違なしと雖も、イエスは已に天の至聖所に入り、聖靈の現に教會に内住したまふ今日にありては、



聖徒は聖靈に感じて、神を「アバ父」と呼び、感謝禮拜及び祈禱を捧ぐる者なれば、此規範は之を教會に授けられたるものに非ざるを知るべきなり。

然りと雖も五節——十三節に於ける主の御訓諭は、我等の爲にも亦甚だ肝要なり。此友なる人は「ひたすら請」へるが故に、遂に其要求を容れられたり（八）。我等も亦「ひたすら請」はゞ、などか賜はらざらん。次に、祈禱は、原則として、必ず應へらるべき性質のものなる事を、主は保證したまへり（十一—十三）。但し此中に二重の意味あり。其一是神との縁に基くもの、其二是神の性善に基くものなり。我等は悪しき者ながら、其子等には善賜を與ふ。況して我等の父に在すのみならず、其本性に於て善に在す神は、いかで我等の懇請を容れたまはざることあらんや。

十四節——五十四節。此處に二人の者ありて、イエスを論難せり。或者は「彼は悪鬼の王ベルゼブルに藉りて悪鬼を逐出せるなり」と曰ひ、或者は「天よりの休徴を求めたり」。而も例により、神聖なる大教師としてのイエスの辯駁は、鐵槌の如く彼等の頭上に臨み、劍の如く彼等の良心を刺せり。其教誨は、循々として彼等の想念を發き、論難者の謂ふが如き惡逆（ベルゼブルに藉りて悪鬼を逐ひ出す程の）と暗黒（天よりの休徴を求むる程の）とは、イエスの中に在るにあらずして、寧ろ論難者其人の中に在る事を證したまふ。是れイエス御親らは「神の指」又「燭臺の上」に輝く燈に在したまふを以てなり。

余は此處にて、本章に現はれたる此傳の特徴に就きて一言せんとす。先づ本章二十六節と馬太傳十二章四十五節とを比較するに、馬太傳の方には「此あしき世も亦此の如くならん」と附記しありて、此惡鬼の侵入したる状態を、特にイスラエルに適用しあれど、本章には此聖句なし。又本章三十七節以下の森嚴なる宣告は、室内に於て談話中に發表せられるも、馬太傳二十三章に於ける同様の宣告は、恰も裁判所に於け



る刑の宣告の如き觀あり。路加傳に於ては、人の子の社交的態度を偲ぶべく、馬太傳の方は、人の子の嚴肅なる裁判權を思はしむ。亦以て兩傳の特徴として見るべからずや。

本章に於て、主イエスが彼の論難者に對して辯駁を加へつゝをりたまへる時、一婦人の「爾を孕みし腹と爾の吸ひし乳は福なり」(廿七)と叫びたる者あり。是れ此大教師の言辭の神聖を證しするものにて、實に路加傳に於ける主の榮光なり。而して亦此れと同時に、他に一人、主イエスの言辭の神聖を證しするものあり。パリサイの人は、而も尚ほ主を其家に請じ奉りたるを見れば、其心の感動したるが爲なる事明かなり。而して、主は此家に入りたまひて後も、尚ほ燈として周く室内を照したまふ。パリサイ宗の傲慢と偽善とは、此燈の光輝に耐へず、其銳鋒を避けんとして、苦心慘憺たるものありき。

#### 第四 路加傳第十二章

——靈界の燈臺——馬太の方は森嚴なる説教路加の方は一片の茶話——貪慾を破壊する一大鐵槌——貪慾は主の再臨を待つ準備を怠らす——最高の憤慨を主に捧げよ

前章の終りに記されたるパリサイ人の家を去りたまへる主は、本章に於ても尚ほ教師として、其御道筋を進みたまひ、斯くて群衆の中に立ちて、直ちに教へを始めたまふ。其趣旨は、前に主が、パリサイ人の家にて實驗したまへる所のものにて、偽善者の中に打混りて、神の聖名の爲に節義を全うせんと志す者は、迫害を受くるの覺悟なるべからずとなり。

主は斯の如く前章に於けると同様、本章に於ても、光として、又大教師として、其



行動を取りたまふ。但し本章に記されたる事件の多くは、馬太傳にも記されあれど、其と此とは異なる趣あり。馬太傳の方は説教なり。路加傳の方は、他の者よりの質疑に對する應答なり。而して此質疑に對する應答こそ、實に路加傳の特徴なりけれ。如何となれば、既に屢々述べたる如く、路加傳に於て主の目指したまふものは、徧く人類なり。人の思想、良心又は愛情、其れ等を動かし、働かせ、之を矯めて、神の基督たる御方の意の如く造り成さん御趣意なり。従つて前章にも述べたる如く、馬太傳に於ける主の御教へは、恰も法廷に於ける宣告の如く觀せらるゝに反し、此傳に於けるものは、恰も一片の茶話にも似たり。馬太傳に於ては、嚴しき教壇より述べられたる様に感ぜらるゝ説教(太五〇—七〇)も此處にては、群衆の擁擠ふ中にて述べられたり。即ち本傳に於ては、イエスの自由に打寛ぎて居りたまへる御姿を拜するなり。

前章に在りし如く、此處にも亦、主の教への權威を證明するもの一人、群衆の中よ

り現れたり(十三節)。此人、主の教へを謹聽したる末、主を以て壓制と富の獨占とに反抗する爲に、世に出でたる人なりとや思ひたりけん、其兄弟の不當行爲に關する申立の次第を聞届けられん事を、主の御前に願出でたり。而も主は光なり。暗黒を責むる事に於て公明正大なり。されば、さきに有司等の中にありて、其宗教的傲慢と、偽善とを譴責したまへる如く、今や此群衆の中に立ちて、貪慾を戒飭したまふ。抑貪慾は、此汚れたる世を貫通する一大主義なり。使徒ヨハネ此を『眼目の慾』(約壹二〇十六)と稱べり。イエスの生活は、其教旨と相待つて、人の心靈を腐蝕さする他の一切の主義に、反抗したる如く、亦此主義の上にも、一大鐵槌を下したるものなり。使徒パウロの所謂『大なる難の中に試みを受るとき、彼等の喜び甚しく、亦大なる其貧、彼等の惜みなく施す所の富厚を彰せり』(哥後八〇二)てふ新生活の妙味は、正しくイエスに於て完全の域に達したり。イエスは元來富める御方なり。彼は甚だ大なる財囊を所持



したまへり。數個のパンに命じて、數千人を養ひ、残りの屑を十二個の籠に充し得たり。水を酒に變へ、海中より若干の黄金を呼出し、又全地の主として御乗用の驢馬を徴發したまへり。然り、全宇宙は、實に彼の財囊なり。而も彼は此財囊を、御自身の爲に開きたまはざりき。彼は敢て自ら貧しくなりたまへり。枕する所さへ無かりしによりて見れば、彼の貧や如何に大なりし。而も此大なる貧は、惜みなく施す彼の心の富を彰はす好機會なりき。彼は甘んじて徒歩し、饑渴に堪へ、加之、例へば御自身と其弟子等の爲に備へられたる、數個のパンと、數尾の魚、若くは、かの小さき財布(約十三〇廿九)、かゝる少許の貯藏金品の中より、常に好んで施したまひしか。貧しき時にこそ、心の富は彰はるれ。

イエスの御心！ あはれ畏き御心かな。この心の發現たるイエスの日常生活が、世人の貪心に對する一大鐵槌たりし事、推するに堪へたり。相續財産の分配を請求した

る此人(十三節)の心は、イエスの惜みなく施したまふ御心に比し、其懸隔の如何に大なりしよ。主は此人の提出したる問題を利用して、弟子等の貪心を戒めたまふと共に、此貪心は、主の再臨を待つの準備を怠らすものなる事を警告したまふ。その御教へに従へば、主の再臨の事實に、三種の態様あり。その一は、夜中人家を驚かす盜賊の如く、竊に來りたまふ事(即ち主の再臨は、聖徒を世界より取上る爲に來りたまふものなるが故に、聖徒の希望とする所なれども、此世界に對しては、恰も盜賊の如くなり)。其二は、忠義なる家宰に報酬を與ふる主人として來りたまふ事、而して其三は、敬愛せらるゝ主人として、警戒を怠らざる其僕等に、再度その御前の幸福を味はせん爲に來りたまふ事是なり。

主の再臨の事は、馬太傳にも記されたり(太二十四〇二十五〇)。路加傳に、主の再臨を慕うて警戒する僕として記されたるを、馬太傳に、新郎を迎ふる童女として記された



る所に、二者の相異はあれど、主を待つ精神に至りては、二者同一なり。窃に來りたまふ主を、警戒して待望むにもせよ、報酬を得ん爲に待望むにもせよ、又は、新郎たる御方を喜びて待望むにもせよ、我等は一切の願望にも優りて、主を慕ひ、望みまゐらす事、我等の本分なり。主が斯く我等の愛情を求めたまふぞ嬉しき。主を禮拜すとは、最高の憧憬を主に捧ぐるの意義なるを忘るべからず。

斯の如く、資産分配問題は、主の談話を、他の方面に導きけるが、主の生命の光は、やがて其處にも照りわたりぬ。教法師もパリサイ人も(前章末)、群衆も(本章の始め)、將又富める人も(十三節)、世は凡べて暗黒に蔽はれけるかな。生命の光は、此暗き世に彰はれて、各方面を隈なく照しけるぞいみじき。

### 第五 路加傳第十三章

——兄弟を訴ふるは其實己れを訴ふるなり——將來一層怖るべき大殺戮者パレス

チナに襲來すべし——斯く思ひ惱みつゝ旅立ち給ふ——主エルサレムに入り給はば萬事休す——エルサレムの末路——噫、可憐のエルサレム——問はれたる事柄に重きを置かず問ふ人に重きを置きたまふ——靈魂を救はんとする愛の發現——人格の圓滿なる發達を期せよ——理智に偏せざれば則ち感情に偏するが我等の通弊なり——エルサレムに對する愛惜の情

第一節乃至第五節。此の教へは前章のと同時期に、同じ原理に就て、せられたるものなりと余は信ず。かの己れの兄弟を主に訴へたる人は、己れも同じく、己れを訴ふる人に引致せられて、裁判所に行く途中に在るものなることを主より教へられたり。前章五十八、五十九兩節の聖言は、此人(己れの兄弟を主に訴へたる人)を指して言はれたるものなるべし。本章(一—五)に於てせられたる教の原理、亦此と同一なり。人々、ガリラヤ人の遭難事件をイエスに通告せり。此通告に據れば、此等ガリラヤ人は、恰も他のガリラヤ人よりも、一層惡しき人々なりしが如くにも考へらる(約九〇



二参照)。従つて斯く通告したる人々は、恰も其兄弟を主に訴ふるに似たり。而も一般のガリラヤ人と雖も、もし悔改めずば、亦此等遭難ガリラヤ人と同じく、滅亡を免れじとなり。

(著者註曰、此事件は、ガリラヤのユダ騒動(徒五〇三十七)に關聯して起りたるものなり。此騒動に参加したる若干のガリラヤ人は、カイザルの權威を無視したるものに外ならざれば、ピラトの激昂すべきは無論なり、と或人曰へり。而してガリラヤはヘロデの領土なるに(路三〇二)ピラトが斯く干渉したりしの故を以て、兩人の間に紛争を醸したるものゝ如し(路廿三〇十二)。又ユダヤの史家ジョセフアスは、若干のガリラヤ人が、ゲリジム山の神殿に行く途中、ピラトの爲に殺害せられたる由記述せり)。

第六節乃至第九節。ガリラヤ人を殺害したる人よりも、一層恐るべき大殺戮者、大河の決する如く漲來りて、イスラエルの全國土を馬蹄に蹂躪するの時、將に到らん

とす。此國民の心狀は、此刑罰を受くる爲に機正に熟したりといふべし。イエスは愛國の情禁する能はざりけん、無花果樹の譬を以て、彼等を警め給ひぬ。神より萬般の法令と諸種の特典とを賦與せられたるイスラエル人は、正しく葡萄園の中に植付けられて、町重に栽培されたる無花果樹にも比すべし。而も此無花果樹は、根なきが故に果を結ばざりき。忍耐深き園丁にて在すイエスの教務は、此事實を證したり。神の善の表現たる彼の教務は、彼等を悔改めに導きたり(羅二〇四)、此根無し無花果樹を栽培することに於て、懇切を極めたり。而も終に實らざりき。イスラエル自身、此亡國の狀を悟らざりしことは、次の事件(第十節乃至第十七節)に徴して明白となれり。此處に病める人ありて、醫を待つこと切なり。而も此處なる人々は、此必要を感せざるものゝ如し。現にアブラハムの裔なる一婦人の病苦に呻吟するを目撃しながら、アブラハム家の宰等は、傲然として名醫の治療を非難したり。



第十八節乃至第二十一節。如上の事實によりて、イスラエル亡國の兆候は、明瞭にイエスの意識に浮び來りしか。大いなる樹に鳥棲み、パンの發出れてをる事、皆如上の事實に基きたる御物語りなり。斯る氣分にて、主は旅路に進ませらる。イスラエルの罪は證明せられたり。彼等は將に亡びんとす。斯く思ひ悩み給ひつゝ、エルサレムに向つて旅立ち給ふ。

第二十二節乃至第三十節。此處にて主のエルサレム御旅行に關し、一言讀者の注意を促し置くは、蓋し無用の事には非ざるべし。約翰傳には、主が屢々エルサレムへ上られたる事記されたり。是主が、天よりの旅人として見給ふ時は、エルサレムなりとて世界の他の都市に比して、毫も優る處なきを以てなり。然れども他の福音書に於ては、エルサレムは、ダビデの裔としての主の政治上の中心たり。従て主の御教務終らば、主は國王の資格を以て、シオンの女に王國を授けんが爲に其處に臨みたまふべ

く、其時其處にて全然且公然拒絶せられたまふべかりしが故に、其時まで主は彼處に赴きたまはざりしなり。偕此後段の意味に於て、主が徐行しつゝ、エルサレムに近づきたまふ事につきて、路加の記せる處は、馬太、馬可兩傳に比して一層顯著なるを覺ゆ

(路九〇五、十一、十三〇二十二、廿三、十七〇十一、十八〇三十一、十九〇一、十一、二十八等を参照せよ)。

抑主がエルサレムに於て拒絶せられたまふてふ事は、此國民が罪の升目を満す時なり。彼等が刑の宣告を受くる日なり。主は恰も此宣告の日の近づくを喜びたまはざるかの如く、此場所より彼の場所へと移りたまひて、殊更に旅程の進行を遅くしたまふやうに見受け奉る。主の恩寵が罪人の悔改を待つは、今も尙昔に異ならず。今日主の來りたまはざるは、神の寛容なり。一人の亡ぶるをも好みたまはずして、其救はれん時を待ち給ふ。而して主が斯くエルサレムに近づく事を躊躇したまふ事に就て、余はエゼキエル書(一章乃至十一章)に於ける、かの榮光の、エルサレムを去らんとする當時の狀



況を追想す。此預言書を見るに、榮光は此の場所より彼の場所へと移り行く、其狀恰もエルサレムを去るに忍びざるものゝ如し。然りながら、俯してエルサレムの腐敗を見る時は、其處に止まることは絶對に不可能なり。榮光エルサレムを去らば、萬事休す。主エルサレムに入りたまはんか、其結果は刑の宣告となるべし。主がエルサレム入りを躊躇したまへる御眞意、實に此處に存したりしと覺ゆ。

路加傳九章五十一節に従へば、此御旅行は正しく、主の榮光に入りたまふべき御途出なり。又十八章三十一節に従へば、此れは苦難の場所——エルサレム——への御道筋にてもあり、尙又本章二十二節の眞意を窺ふ時は、此れはエルサレムに刑の宣告を下したまはんが爲の御旅行ともなるなり。此宣告は、イストラエルの「救の日」の終了を意味す。本章に記さるゝガリラヤ人の事、無花果樹の譬、將又病める婦の事等、何れかエルサレムの末路を語らざりし。

一步、又一步、エルサレムは近づきぬ。見よ最早エルサレムは、雲際遙かに可憐の姿を現はし來れるならずや。刑は終に宣告せらるべきか。「救の日」は終らざるべからざるか。あはれイエスの御心中、感慨轉た深かりけらし。

イエス遙かにエルサレムを望みて、無量の感慨を懷き給へる時、或人問うて「主よ救はるゝ者は少きか」と曰へり。此人、イエスの舉動により、多少其御心中を推察したりと見ゆ。さて、此問に對するイエスの應答振りは、興深きものなり。請ふ少しく之を述べん。

イエスの應答振りに、自ら一定の方式ありて存するものゝ如し。或人の問に對し、彼は必ずしも、其問の言辭通り又は文字通りには答へ給はず。問はれたる事柄に重きを置かずして、問ふ人に重きを置き給ふ。彼の御言葉が、直ちに人の心と良心とに觸るゝは、蓋し此が爲なり。左に一二の例を擧げん。神殿の將來に就て、教へられ



たる主の御言葉は、いづれの時に實行せらるべきや、との問に對し、彼は此問の文言に從つて答へたまはず、反つて弟子等の心を或重大なる事件に導き、而してかの十人の童女、又は資金を預りたる僕等の比喩を用ゐて、其解答の御趣旨を弟子等の心に銘徹せしめたまへり(太廿四〇及廿五〇)。次に「來るべき者は爾なるか、又我等他に待つべき乎」とのヨハネの問に對して「我は其人なり汝等他に待つを要せず」とは仰せられず、現實に活ける力の働きをヨハネの弟子に見せ、充分なる復命の材料を彼等に授けたまひたり(太十一〇)。本章に於ける彼の應答振、亦實に此に同じ。形式的に答へたまはず、倫理的に答へたまへり。換言すれば、其人をして自問自答せしむるやうに、嚴かなる材料を供給したまへるなり。

イエスの應答振りの此の如くなるは、要するに、智慧と善との表現に外ならず。イエスの目指したまふものは、實に人其自身なり。強ち豊富なる智識の表現にあらず

して、亡ぶる靈魂を懇ろに尋ねて之を救はんとする愛の發現なり。茲に至りて吾人は、人間の應答振りの如何にも憐むべきものなるを思はずんばならず。かの祭司及學者等は、キリストの生れたまふべき場所は何處なりや、との問に對し、たゞ形式的に答へたるのみ(太二〇)。假し應答の言辭に誤りなかりしにもせよ、餘りに形式的なり。何故に此應答を利用して、ヘロデ王の良心を働かすべく努めざりしや。イエスの應答振りは即ち然らず。「汝の父は何處に在る乎」(約八〇十九)との問に對する御答へは、嘗に彼等の耳に響きたるのみならず、深く彼等の肺腑を穿ち得たりしもの、如し。優れて美はしきイエスの御品性を、靜思し默想して、彼の御名を讚美する時に、靈魂の耀きは蓋し其極に達すべし。今や人々刻苦精勵、智識を蓄積する爲に、日も尙足らず。蓋し周圍の壓迫と、智識慾の増進とは、人々を驅つて茲に至らしめたるものなるべし。然りと雖も、眞の精神生活は、單に理智のみによりて營み得べきものに非



す。使徒パウロは、聖徒の智識の増進せんことを祈るに方り、先づ彼等が靈覺（智情）の各一方に偏せず、聖靈の御指導による全靈作用をいふを得せしめらるゝやうに祈りたり（弗一〇十七、十八、西一〇九）。或問題を解決せんとするに方り、人的智能にのみ依據するは十全の策に非ざるのみならず、屢々軌道を逸するの危険あり。或人嘗て言へらく「如何に精神上の事柄なりとて、餘りに多く知らんと欲望は、神御自身を眞實に知らざるの證據となることあり」と。神御自身を知るは永生なり。又或人の曰へることに「舊き人は屢々新しき人に比して、眞理を了解すること敏捷なり。此れ新人は其學ぶ所の眞理を、神の前に於て、自己の良心に適用するが故なり」と。蓋し至言なり。我等は智識を蓄へんとするに急なるの餘り、屢々靈魂の損傷を顧ざることあり。既に言へる如く、理智に偏せず、全靈作用により、人格の圓滿なる發達を遂げんこと、吾人の切に冀ふ所なり。

本章二十四節に記さるゝ「力を盡すこと」と「求むること」とは、同じ心理作用に於ける程度の差に非ずして、全然異りたる心理作用なりと信ず。「力を盡す」とは、全心全靈を神の前に働かす状態にして、斯の如き靈魂は、神の前に安住するものなるが故に、突然の警報に狼狽するが如き類に非ず。之に反し「求む」とは、門は閉ぢられたりとの一大警報に接して、驚愕の餘り、宗教的熱情の勃發したる状態なり。而も此種の熱情は、全心全靈を、神の前に働かせたる結果に非ざるが故に、驚愕の原因消滅する時は、直ちに消えて跡なきに至る。我等は理智に偏せざれば則ち感情に偏す。靈覺を與へられんことは、何れの場合にも緊要なる哉。

第三十一節以下。

エルサレムの愈々近づく程、主の御心を刺戟するものは、其將に受け給ふべき御苦難のことに非ず、又榮光のことに非ずして、たゞエルサレムの罪と、之に對する刑の宣告なり。或人、主に對するヘロデの惡計に就て、主に告ぐる所



ありたり。而も主は、此惡計の到底成功すべからざる旨を、之に答へたまへるのみ。假しヘロデにもせよ、將又何人にもせよ、主のエルサレム入りを妨げ得るものは非ず。イエス職權を以て、其領土内を通行したまふなるに、ヘロデ果して何人ぞ。龍車に對ふ螻蛄の斧か。然るにても此場合、主の目指したまふものは、遂にエルサレムの外あらず。御進行の途すがら、エルサレムに對する愛惜の情は、悶々として御胸裡に往復したりけるが、果然靈火となりて燃え出でたり。噫、エルサレムよエルサレムよ、預言者を殺し爾に遣はされし者を石にて撃つる者よ、母鶏の雛を翼の下に集むる如く我なんぢの赤子を集めんとせしこと幾回ぞや。爾曹は欲ます』(廿四節)。『爾曹は欲ます』！噫、母鶏の慈愛は拒絶せられたるなり。而も狐は已にエルサレムに入込み居れるが故に(路廿三〇七)、雛は集められずして、散らさるゝの外あらず。ヘロデとローマとは歓迎せられ、神と其受膏者とは拒絶せられたり。『シオンの山は荒れ果て、山犬(英譯

聖書には『狐』とあり)その上を歩くなり』(哀五〇十八)。將來イスラエルが、信じ悔改め『主の名によりて來る者は福なり』と言現はして、神の子を奉迎する時まで、彼の執りたまふべき御手段は、シオンの山を、彼等狐共の領有に委したまふの外あざるなり。

## 第六 路加傳第十四章

—— 善拔なるイエスの答辯—— 首席を撰ぶはアダムよりの遺傳性なり—— 開宴の精神の相違—— 神若し此宴會の主人ならば—— 強制的に伴ひ來る—— ひた勞れに勞れたまはん爲め—— 此群集に抑何が爲にイエスに來るにや—— 救主としての彼を満足さするものは何

イエスは此度も亦食事に招かれて、パリサイ人の家に到りたまへり。斯くて家に入りたまへるに、此處に招かれたる人々、イエスに對して何か事を構へんとて、彼を



窺ひけり。然るに彼等の此挑戰的態度に應じて、イエスの爲したまへる答辯の、餘りに警拔なりしが爲に、彼等はこゝに測らずも其想念の誤れを事を自ら證明する者となり、従つて此誤りを自ら訂正せざるべからざるの苦境に陥りたり(二一六)。

イエスは定めの席に着きたまひて後、徐に周圍の人々を視廻したまへり。かく視廻し得るほど、彼の御心は自由なりしなり。さて、第一に彼の御目に注まりしは、人々の首席を選ぶ事なり。

首席を選ぶとは、さても苦々しきの極みなり。かゝるは、神の人の意志にはあらで、アダムの意志なり。是は自分を何物かに仕上げんとする意志に基くものにて、此意志は、太古より人の心の奥底に確と根ざしをるものなり。而もイエスの御生涯は、馬槽の始より十字架の終りまで、徹頭徹尾此意志を否認したり。塵より取りて造られたるアダムは、自ら空しき者なるにも拘はらず、一切の者たらんことを慾求せり。之に反

し、イエスは自ら一切にしていますにも拘はらず、御親ら空しくなりたまへり。神にいます彼が、人と成りたまへるさへあるに、其人の中に最も低き座席を選びたまへるなり。されば此宴席の光景の、甚しく彼の御心を傷めたりしこと、拜察するだに畏し。

次に、此宴席の主人に就て見るに、其根本の主義に於ては、彼等首席を選びたる人々と異なる所なきものゝ如し。唯彼は『舊人』の性質を傲慢の形にて現はし、此はそを利己の形にて現はしたるまでなり。其神意に反する點に於ては二者同一なり。此宴會はイエスの屢々公衆の前に催したまへる宴會とは、全く異なりたる性質のものなり。そはイエスの招きたまへる人々は、何れも其返禮を爲すこと能はざる者なりければなり。

やがて客はそれ〴〵設けの席に着き、宴正に酬なるに當り、更にイエスを悲しませ



たる事こそあれ。

客の一人、イエスに向つて『神の國に食する者は福なり』と曰へりしは、蓋しイエスの言行に感動したるが爲なるべし。而も此は問題以外なり。珍味佳肴は陳ねられ、招待されたるほどの人々は、來りて各々定め席に着き、宴正に酣なり。イエス謂ひたまふらく、神若し此宴會の主人なりせば、是程の客は易くは集り來るまじと。是に於てか『或人おほひなる筵を設けて……』云々の譬へあり。

『神の置給ひし堅基立』てるが故に（提後二〇十九）人の不信仰は、毫も神の御計畫の遂行に妨げなし。然りながら、人の開ける宴會は、屢々盛況を呈するに、神の宴會には、招きに應ずる人なしとは、そも何事ぞ。人の宴會の盛なるが爲には、單に招待狀を發するのみにて足れりとするも、神の宴會は、單に招待狀を發したるのみにては成立せず。甲は曰く『我れ田地を買ひたれば、往きて視ざるべからず。願くは我を允したま

へ』乙は曰く『我れ牛を買ひたれば』云々。又丙は曰く『我れ妻を娶りたれば』云々。招待狀を發すると共に、強制的に伴ひ來るにあらざれば、神の宴會は成立せず。うたてきは人の心なり。神は、一方に於て、山海の珍味を宴席に陳ねたまふとともに、他方に於て、其僕等をして『道路や藩籬の邊りにゆき強て人々を引來り其家に盈しめ』たまはざるべからず。畏きは神の御配慮なり。

イエスは實に、或人の言ひけん如く、御心のひた勞れに勞れたまはんが爲に、世に出でたまへるなりしか。此世は各階級を通じて『生命の驕傲と眼目の慾』（約壹書二〇十六）とを以て充滿する場所なれば、イエスたるもの、唯夫れ『悲哀の人』たるの外あらず。打ち寛ろぎて友情を樂むべき筈の宴會すら、尙且此高潔なる天來の旅人を斯く悲ませたりとせば、他は多く云ふに及ばざるべし。

イエス、パリサイ人の家を去りたまへる時、多くの人々彼に隨ひ行けり。然れど、斯



く多數人の彼を圍繞する事、必ずしも彼の感興を惹起すものにあらず(路八〇四十五)。幾千幾萬の人々、彼處の街巷此處の大路に、おしあひへしあひ、彼の周圍に人垣を築くが如き、殆ど日々の事柄にして、さまで稀有の事にあらず。而も此群集は、抑何が爲にイエスに来るにや。惟ふに、彼等は教師或は模範としてのイエスを歓迎するものなれども、**君主**としてのイエスを要求せざるらし。此時此群集に對するイエスの訓言の、甚だ嚴格なりしは之が爲なり。イエスの御眞意を知らずして、集ひ來る人々に由り、彼の御心の息まらざるは是非もなし。ニコデモはイエスを以て學者なりとなし、彼をラビと呼びて敬意を表したり。ガリラヤ湖畔の群集は、イエスを王者として尊敬せり。今又此處なる群集は、模範或は先覺者として、イエスを歓迎したるなり。而も彼の御心は、是に由りて息まらざるを如何せん。但し此種の歓迎は、かのパリサイ人の家にての傲慢又は利己主義などに優ること數等なるべしと雖、彼の御満足にあらざる

點に於ては、兩者の間大差なきが如し。然れば、イエスは救主としての御心の満足するまで、喜びを得たまふまで、御道筋に進みたまふの外なし。

彼に何物かを捧げんとの眞心は、彼の嘉納したまふ所なること疑なし。然れど、彼より受くる事の、彼の最大の御満足なるを忘るべからず。パリサイ人の宴會は、彼をして失望せしめたり。群集の歓迎も、尙且彼をして満足せしむるに足らざりき。然らば、救主としての彼の御心は、到底満足するの時なかるべきか如何。吾人は神に感謝す、彼より受くる外に、捧ぐべき何物をも持たざる『**税吏と罪ある者**』の、來りて彼に聽くに及びて、初めてその御心に、溢るゝばかりの喜びを味ひたまひき。是れ實に本傳第十五章の問題なり。



### 第七 路加傳第十五章

——税吏の輩に圍まれたる喜の人——救ふ喜——我れ彼等を喜ぶ——福音は神を喜ばす音信なり——天とは何ぞや

彼等税吏と罪ある者共は、聖き市の汚れにして、又それを自ら承知する徒輩なれば、パリサイ人などの家には近くべくもあらず。然りとて群集の道伴となりて、イエスに隨ひ行くも憚れば、唯密かにイエスの御裳の縁にだも捫らんのみ。恥しき乏しき心の水瓶に活ける水を汲取らんとて、恐るゝ活ける水の井の傍に跪かん事、是れ彼等が爲し得る唯一の仕事なり。而も斯かる徒輩に與ふるが、イエスの御喜なり。かのパリサイ人に招かれたる人々の爲に、又彼等を招きたる主人の爲に、さて又群集の爲に御心を疲らしたまひしかども、茲に罪ある人々の來りて、彼の賜を受んとす

るに及びて、初めてイエスの御心は息らひたり。與ふる喜の爲に、先の御疲をも忘れたまひぬ。迷ひ出でたる羊を探し當てたる牧者の如く、失ひたる金銭を見出したる婦女の如く、又放蕩兒に再會せる父の如く、救主イエスは此等税吏や罪ある者共に圍まれつゝ、今や喜の人となりたまへるなり。

イエスの罪ある人々に接するを視たるパリサイ人は、イエスの教務を以て是れ恰も善行を奨勵せずして、反つて悪事の遂行を自由ならしむるに等しきものなりとなして、彼を攻撃せり。此挑戦に一矢を酬めん事、イエスに於て素より容易なり。神を崇めんが爲に罪人の所要を給したまふてふ御主意に基き、恩寵の眞意義を闡明し、以てパリサイ的驕慢に一棒を加へん事、イエスに於て爲し得ざるにあらず。而も救ふ喜び、是れ本章を一貫するイエスの御趣旨なるが故に、専ら此方面よりして彼等に答へたまへり。



然れども請ふ我等をして、救ふ喜よろこびてふ事を記憶せしめよ。茲に人ありて、神は何故に罪ある人々を斯くも懇切こんせつに取扱ひたまふかを、問ふことあらば、神は之に答へて、我れ彼等を喜ぶが故なり、と仰せらるべし。彼等の集つどひ來るは、神を喜ばせ、又神の宮居みやゐなる天に喜よろこびを満すと成り。是何等の福音ぞ。然れば、本章に現はれたる場面は、イエスの爲には正しく神の家なり、天の門なりと、謂ふことを得べし。

然るにても、牧者は迷出まよひいでたる羊を探ね當てたりとて喜び、婦女は失ひたる金子を見付けたりとて喜ぶに、それを嫉あやみて譏つよくは、ゆゑしき僻事ひがことなり。而も斯の如きは、イエスを攻撃するパリサイ人の心なり、父を非難する長子の心なり。罪ある人々を憐む所以ゆゑは、斯することが我が喜よろこびなるが故なりと、イエスは仰せらるゝに、彼等は何故に譏つよくにや、何故に此救ふ喜よろこびを信せざるにや。牧者が羊を獲て喜ぶこと可なるものならば、神が罪人を接あけて喜びたまふに、不可なるの理あらんや。夫れ神の福音は、

之を計畫し、之を遂行すいこうしたる神御自身を喜ばす音信おとづれなり。我等をして、此神を喜ばす音信おとづれの眞意義を熟慮深考じゆくりしんかうせしめよ。實に本章の光景は、現に我等の救はるゝに依る神の御満足の有様を、遺憾なく描き盡したるものなり。

本章の現はす場面が、疲れたまへるイエスの爲に天の門なりしならば、そは我等の爲にも亦天の門なり。そが救ふ御方の爲に神の家なりしならば、救はるゝ我等の爲にも亦神の家なり。パリサイの人々、招かれたる客、招ける主人、さては群むらがる人々、彼等の居る場所は、イエスの御道中ごだちゆうとも謂ふべく、彼御自身を要求する罪人と共に坐したまへる場所こそ、やがて彼の御宿舎おんやどりは——息らひたまふ場所とも謂ふべきものか。天とは何ぞや。天の意義を一方面より説けば、それは本章に現はれたる場面の擴大せられたるものに外ならず。天は救ふことを喜びたまふ救主の宮居みやゐにして、又救はれたる罪人の住所すまかたるなり。



### 第八 路加傳第十六章

——不義なる番頭の意義——將來の幸福の爲に現在を犠牲にせよ——如何にして主に事ふべきか——所謂完成宗教家の倫理的價值如何——將來なる哉——公明正大の裁斷——龜鑑以上なり禮拜の問題なり

先きにかの婚筵こんえんに列席せる人々を戒め、此筵えんの主人を諭し、出で、は群集ぐんしゆを教へ、又パリサイ人と學者等の前にて、天の喜びを證あかししたまへる主は、本章に於て弟子等を勸すすめ勵はげましたまふ。

抑おさ一般人類の中にて特別の召めしを蒙かうむり、神に忠義を盡すべしとの條件の下に、若干の『所有もちもの』を授けられし者がユダヤ人なり。此ユダヤ人、神に不忠なりければ、其『所有もちもの』を取上げべしとの嚴命げんめい下れり。然れども、此嚴命げんめいの通り、いよく其『所有もちもの』を取上げらるゝ迄には、尙若干の期間は残れり。此残れる期間が、やがてユダヤ人と

名づくる番頭の、神に對して『其會計』を算用すべき時期なり。此に記さるゝ『不義なる操會者』の意味は、蓋し此邊に在るものならん。

然るに、此期間内に其『所有もちもの』を運用することは、一に此番頭の權限けんげんに屬するものなれば、之を私益しえきの爲に費つひやすことも出來得る次第なるに、彼はしかせずして、之を其主人の債務者さいむしやの利益の爲に使用せりとせば如何。これ取りも直さず、己が將來の幸福を計る爲に現在の利益を犠牲ぎせいに供したるものなり。然れば『主人其所爲の巧なるに因りて此不義なる操會者はんとうしやを譽めたり』(八節)。

今や弟子等は、恰もかの父の家に歸り來れる放蕩息子はうたうしごの如し。されば、彼等に取りての當面の問題は、如何にして救はるべきかに非ずして、如何にして主に事ふべきかに在り。彼等にして、主に在りて爲す勞務らむの決して徒爾とじならざるべきを知らば、須らく目前の小利せうりを棄て、將來の大幸を取るべしとなり。將來の幸福を專念せんねんしたる番頭



の譬、亦頗る機宜に適せる御教訓ならずや。

さはれ何事ぞ、パリサイの人々は、此天來の聖訓を一笑に附し去れり(十四—十八)。これ彼等は現世の利益を求むるに汲々たればなり。彼等は蓋し、世界の稱讃を博するに足るの人々なるべし。彼等は實に然かせられんが爲に齷齪たる者なり。そは、時人彼等と呼ばて『完成宗教家』と曰へりしに由りても知ることを得べし。而も彼等の倫理的價值如何。彼等、名は神の法律を尊重すと稱せらるゝ者なれども、實はそを犯す者なり。主が彼等に向つて發したまへる簡短なる一語は、全然彼等の倫理的無價値を曝露するに足れりき(十八節)。

さても彼等は頑迷の人々かな。主義として、彼等は世界の富める人なり(十九節以下)。日々『紫袍と細布を衣て』驕奢を極め、現世に満足せり。而も他面に『ラザロ』の在るあり『犬來りて腫物を舐む』。將來、やはか活ける神の審判無くして止むべき。

本章を去るに當り、尙ほ讀者の留意を請ふに足るべき一問題あり。イエスの御裁斷は飽迄も公明正大なりとのことは是なり。公明正大なり、故に阿らず偏らず。従て一事を裁斷せらるゝに當り、此事件若くは、此人物は、我と如何なる利害關係ありやなど毫も顧慮するの要なし。是れ我等の判斷と屢々性質を異にする所なり。我等は一事を判斷するに當り、先づ此判斷の目的物たる事件又は人物が、那邊にまで我等自身に利害を及ぼすべきかと自ら問ふ。故に我等の判斷は、此利害關係に伴なふを常とす。其の我等に利なるを譽め、我等に不利なるを嘲る。イエスに於ては即ち然らず。かの婚筵にイエスを招待したるパリサイ人の好意は、毫もイエスの嚴格なる席上訓戒の發表を妨げざりき。互に打寛ぎて交誼を温むべき宴席も、イエスをして事物に對する公正不偏の裁斷を聲明するに躊躇せしめざりき。ペテロの幸なる告白を稱讚したまひながらも、乍ち彼の心の世界化を戒飭したまへり。阿らず偏らざる彼の態度は、恰も昔日、



陣營に歓迎せられたまひながらも、尙イスラエルを敵手に交付したまへる、聖なるイスラエルの神の態度に髣髴たり(母前四章)。要之、利害の觀念を超越したる主イエスの御裁断は、我等をして事を断ずるに臨みて、私心を狭まざらしむべき不易の龜鑑たるなり。

然り、イエスの一舉一動は、我等の龜鑑なり。而して龜鑑以上なり。禮拜の問題なり。それは燦として、我等の日常生活を照らす。而もその光輝のまばゆきが爲に、我等時に或は昏倒するなきか。我等の生活が、彼と背馳することの余りに甚しきを感じずる所よりして、動もすれば絶望的悲嘆に陥るなきか(哥後二〇七)。而も斯の如きは信仰に非ず。信仰なるものは恰もかの放蕩兒に於けるが如く、其過去に於ける一切の失態をも忘れ去り、長子の怨言にも將又何人の冷評にも介意せず、一意専念父の命じて奏でしむる音楽に傾聴するものなり。信仰は左右の事物には左のみ重きを置かず、神に

向つて直進す。神に向ひて進み、神に達し、神の御心に入り、而して神の愛に息む。  
『主よ、我等に信を益させよ』。

### 第九 路加傳第十七章第一節乃至第十九節

——頭かのやう心せよ——神の國の心理的要素——信仰は聖徒の新生活に動力を供給する心理作用なり——信仰の二個の重要な性質——禮拜問題——真正禮拜の實例——天啓の趣旨を體認して禮拜するが真正禮拜なり——教會は特殊の天啓と特殊の禮拜能力とを授かりたり

第一節乃至第十節。 前第十四章乃至第十六章の光景に於て、主は人の躓となる場合を數多見聞し給へり。此見聞に従ひ、今此處にて密かに弟子等を警戒し給ふ。此れと同時に、神の國の顯現及び其建設準備として、全力を盡すべき筈の人々は、反つてそれを妨害する人々となりたれば、此等躓きとなる人々に對して、主は此處に禍詛を



宣告し給へるなり。

神の國の性質と兩立せざる主義、神の國の建設を妨害する主義、此等がやがて人を躓かすなり。弟子等を躓かせざらんが爲に、一層周到なる御注意を以て、主は此處に、二箇條の教訓を垂れ給ふ。其一是廉直なり。其二是慈悲なり。罪を犯す者ある時、此を「諫む」るに由り、神の國は聖淨なるべし。是れ廉直の徳なり。罪を悔ゆる時、此を赦すにより、神の國は和氣霽然たるべし。是れ慈悲の徳なり。此等の諸徳は、寔に神の國の心理的要素を成すものなり。

然れども、此聖訓の趣旨に従ひて行はんことは、弟子等の到底能くする所に非らず。此れは是れ諸の徳の本源たる御方に、密接に聯り居る時に、始めて行ひ得る事なり。「我等に信を益させよ」とは、蓋し此痛切なる要求に出でたるらし。そは信仰は我等をして、諸徳の本源たる御方に聯らしめ、又我等の需要を充さんが爲に、神の備へ給へ

るものを我等に收容る、心理作用なればなり。信仰のことに就ては、前章にも聊か述ぶる所ありたれど、尙ほ左に數言を追加すべし。

羅馬書第四章に従へば、罪人は福音を信じて義とせらる。即ち我等の犯罪は、少しも自己の行爲に基かずして、全然恩恵に基き、信仰に由りて免除せらるゝなり。此意義よりいへば、信仰は、單に自己に對つて告げられたる事柄を、其まゝ自己に收容する丈の心理作用なり。而も此方面より見れば、信仰の意義は此にて充分なり。然れ共、希伯來書第十一章に従へば、信仰には尙ほ他の重要な方面あり。即ち、信仰は聖徒の新生命に、動力を供給する心理作用なりとの事はなり。本章記す處の主意亦此に同じ。此意義よりすれば、純粹確實なる信仰は、心靈の發達向上を促進し、聖徒をして、神との靈交を保たしむるの用を爲すものなり。従つて希伯來書第十一章一節に「それ信仰は望む所を疑はず未だ見ざる所を憑據とするものなり」とは、既に一旦受



容れたる事柄を、尙ほ翫味し體認して、其處に深く入り込む事なり。信仰純なれば、神の生命の力が、我等の靈性に作用する事、充分なるが故に、靈性は健全となり、新生命は躍動すべく、信仰不純なれば結果は其反對なるべし。信仰あらば、神の國の力は我等の中より顯はるべし。信仰は我等をして、神を理解し、神を待望み、而して神と偕に歩ましむ。常に清新の氣分を保ち、元氣潑瀾たるを得るは、信仰の徳なり。靈狀斯の如くなる時ほど、反つて我心靈に於て、神との交通の甚だ貧弱なるを感すべければ、此時、我信仰弱しと自白するならば、其は蓋し誠意より出でたる告白なるべし。主は、弟子等の、信仰を益加へ給へとの懇請に應じて、信仰に關する二個の重要な性質を説きたまへり。信仰の絶對的權能と、信仰の自制と是なり。命令を以て桑樹を海に移植するは、是れ信仰の絶對的權能なり。而も神に對ひては、謙りて自己の無能力を告白す。是れ信仰の自制なり。之を要するに、信仰の極意は、一切の資源を神

に存置すると共に、一切の頌榮を、神に歸するにあるなり。

## 第十一節乃至第十九節。

此數節は此丈けにて、別に一個の問題を成すなり。此

處にて主は再びエルサレムへの進行を始めたまひ、途すがらサマリヤ及ガリラヤを経由したまふ。至極簡單なる此記事、頗る興味深き問題を、我等の前に提出す。そは、獻物及禮拜の場所として神の定めたまへる祭壇といふ事なり。

神を知るは人智の及ばざる所なれば(哥前一〇二二)神に關する一切の知識は、之を天啓に待つの外なし。禮拜の事亦然り。神は各時代に於て、機宜に適して、夫々天啓を垂れたまひたり。此に於て人は神を知り、又神を拜する事を得るなり。今此問題を學ぶ爲に、太古に溯りて、眞正の禮拜者の實例を述べん。

アベルは信仰に由りて、即ち天啓に従ひて(來十一〇)神を禮拜したる人なれば、之を眞正の禮拜者といふべし。彼の捧げたる羊の初子は、婦の裔の踵の碎かるゝといふ約



東に従ひて、捧げたるものにてあり、又神エホバのアダム、エバに衣せたまへる、革衣の眞意を體得したる結果なりき。

ノアはアベルの主義を踏襲し、歸の裔の踵の碎かるべきを信じて禮拜したり。彼が新世界を受継ぎたるは、一に血の眞價に因りたるものなり(創八〇二十)。

アブラハムが眞正の禮拜者なりし事は、神の啓示に違はずして禮拜したりしによりて知らる(創十二〇七)。

イサクは、嚴正にアブラハムの例に倣ひ、己に顯はれたまへる神を禮拜したり。彼は濫に現世の榮達を求めず、アブラハムの轍を踏みて、啓示せられたる神の爲に祭壇を築きたり(創二十六〇二十四、二十五)。

ヤコブも亦眞正の禮拜者なりき。彼の悲哀の時凋落の日に於て、神は彼に顯はれたまひき。犯し、罪の報い來りて、悲慘の境遇に陥りけるが、神は此時に於て、彼に御

自身を顯はし、神の『矜恤は鞫に勝つ』(雅二〇十三)ことを示したまへり。彼は即時に天啓の趣旨を敬承し、而して斯くベテルに於て顯はれたまへる神を以て、終生己が神として事へき(創第二十八章及第三十五章)。斯の如く、先づ天啓あり、而して此天啓の眞意を服膺して、神を拜するを、眞正の禮拜とはいふなり。

イスラエル國民は、眞正の禮拜者なりき。そは神之に御自身を啓示し、神を記念する場所を、彼等の中に設置したまひたればなり。彼等は其拜する御方を知れり(約四〇二十二)。而して此國民の中にも、亦恒例の方式に據らずして、特別の方式に據りて禮拜したる眞正の禮拜者ありき。而して此特別の方式なるものも亦、新たなる天啓に従ひたるものに外ならず。例へばギデオン、マノア又はダビデ等の如し。此人々は恒例に據れる國定の拜殿に於て禮拜せずして、打穀場又は巖の上等にて禮拜したり。そは此等の場所は、神の新啓示によりて選定せられたる、別種の祭壇なりければなり(士六



○、十三〇及代上二十二〇。

今や此處なる癩病人、エルサレムの神殿へは行かざりしかど、イエスの足許に俯伏したりしによりて見れば、その真正の禮拜者なる事、前の人々と毫も異なる所なし。彼はイエスに於て神の新啓示を認めたり。其癩病の癒えたる刹那、彼は神の聲を聞きぬ。神ならでは、治する事能はざる、此癩病の癒えたるは、彼が信仰の耳には、神の聲として響きけるなり（王下五〇七）。

神の教會も亦、現に一層廣汎なる天啓を授かり、御父と御子イエスキリストとの靈交を喜びつゝ、『眞を以て』禮拜する者、言換れば、天啓に従ひて禮拜するものなれば、前記の場合と同様の意味に於て、真正の禮拜者なるは言ふまでもなし。加之聖靈は禮拜の能力として、教會に内住せらるゝにより、聖徒は神を『父』と呼び、イエスキリストを『主』と呼び奉る次第なれば（哥前八〇六）、教會の禮拜は『眞を以て』する外

に、尙ほ『靈を以て』する禮拜なり（約四〇二三）。教會は禮拜の目的を完成する爲に、特殊の天啓を授かりたる上に、尙ほ特殊の能力を賦與せられたるものなり。

禮拜の問題を學ぶは、甚だ興味深き事なり。吾人此サマリヤの癩病人の信仰に、太く勵まされたれば、此問題に就て尙少しく所感を述べべし。彼はイエスの御足許を以て、神の新たに定めたまへる祭壇と認められたれば、エルサレムなる祭司の許より直ちに引返し來りて、此眞の祭壇に感謝の獻物を捧げたり。病を癒す聲は、彼に取りては神の聲なり。彼の必要を充したるは、イスラエルの神の憐みなり。此ぞ彼に取りての天啓なりける。彼は此を信じ、此に導かれて、至聖所に入り、神を讚美したり。此事實は、我等被造物が、神を禮拜する唯一の根據なり。従つて我等の如何なる時代の人なるや、又は如何なる制度の下に生活する人なるやは、その問ふ所に非ず。彼は病を癒され、又其癒されたるを意識したり。神は我が最大最急の需要を充したまへり。此意識、此



處に依據して禮拜するが眞の禮拜なり。我等の良心、時に或は驚愕の餘り、呻き叫ぶ事あらん。而も此は禮拜に非ず。此叫びは、或は父の御手に引かれて、至聖所に到るの機會となり得べし。而も此れ未だ以て禮拜とはいふべからず。キリストの血流れて、初めて我等は、活ける神を禮拜する者となれり。我等をして死の業より脱却せしめ、良心を潔めて、神を禮拜せしむるまでに導くものは、キリストの血、唯其れのみ(來九〇十四)。聖徒は、天にて榮を受けたる後も、永久に此血の尊さを言現はしつゝ、禮拜すべし(黙五〇九)。「贖罪によりて表はされたる神の矜恤に、如何にしてか酬い奉らん。全生を感謝の供物として、神に捧ぐるの外はあらず。斯くするが、我等の蒙りたる召なり。愛もて働く信仰に由りて生活し、神を慕ひ參らするの情、油然として湧き出づる時、我等は、日常生活其まゝにて直ちに神の祭司たるべく、又贖罪主の證人たるべし。是れ爲すべきの祭事なり」と或人の言ひしは味ふべきことなり。御靈の聖訓に従

へば、我等を神殿に導き入れ、其處にて祭司の職をなさしむることが、神の矜恤なりとなり(羅十二〇二)。而して此矜恤を我等のものとなすに先ち、我が贖罪主は傷つけられ、打たれたまふ事、必要なりしなり。

吾人の禮拜するは、宜しく如上の立場に於てすべきなり。此れ恰も彼の詩人が、すべての被造物に對つて神を讚美すべきことを要求したる後「わがたましひよエホバをほめたまへよ」(詩百四十六〇二)と曰へりしが如し(譯者因に曰、此節の初めの一句を直譯すれば「汝等エホバをほめたまへよ」なり)。

## 第十 路加傳第十七章第二十節乃至第十八章第八節

——神の國に二個の態様あり——神の國顯現の刹那の狀況——ロトの妻の末路に留意せよ——大能の内在一——大能の内在を意識したる結果——沮喪せずして祈れ

第四段、第十七章第二十節乃至第十八章第八節



問題は『神の國』なり。然れど、その建設せらるゝは何れの場所なるべきか、又何れの時なるべきか等の事柄に就きては、具體的に學ぶ所あらず。吾人既に述べたる如く、斯の如き事柄は、路加に於ける聖靈の御主意に非ず。然れども、此バリサイ人の質問を利用して、主が此所にて教へ給ふ事柄は、甚だ重要なり。主は或人の質問に對し、必ずしも、其質問の言句に従ひて答へ給はざる事に就きては、吾人亦既に述べたり。此處にて主の答へ給ふところ、また之に同じ。即ち質問の言句に拘らず、質問者の心狀を洞察して、其良心を指し給ふなり。

此の御趣旨よりして、自然その御答へは、二様に分たる。同じく『神の國』といふ問題なれど、バリサイ人に對するものと(二十、二十一)弟子等に對するもの(二十二以下)とは、その御教への内容同一ならず。即ち前者に對しては、其靈狀の爲に飽まで忠實なるを見るべく、後者に對しては、理解力の程度に従ひて、新らしき心に適當の糧を給

せられたるものなり。『我なほ爾曹に多く語るべき事有れども、今なんちら曉ることを得ず』(約十六〇十二)と言はれたるも、亦其成長の度合を察し給ふ事に於て同様なり。後年パウロが、かの新らしき事を好むアデニス人に對し、彼等の好奇心を満足さするやうには答へず、嚴格に審判と悔改とを宣べたるは、蓋しイエスの御趣旨を體得したる結果なるべし。

『神の國』といへば、普通には、一切の事情に對し、神の權威の實行せらるゝ時代、といふ意味に解せらる。使徒パウロの『そは神の國は言に在らず、能に在らばなり』(哥前四〇二十)といへりしも同意義なり。然れども、此處なる主の聖訓に従へば、それは二個の方面より觀察せらる。神の國の王たる御方、現にユダヤ人の衷に在し、又若干の人々、彼を信じ彼に従ふに由て見れば、神の國は、人々の衷に在ること、甚だ明白なり。次に『人の子の日』とは、神の國を、他の方面より觀られたるなり。斯くの如く、



神の國に二様の意味ある事は、約翰傳第十八章に於ても同様なり。其處に録さるゝところによれば、主はピラトの面前に於て、御自らのユダヤ人の王なる事を承認し給ひたれども、當時は未だ此王權の實現せらるべき時期に非ずして「眞理を證」すべき時期なる事を、彼に告げ給へり。換言すれば、王權の實現としての神の國は將來にあり、眞理の證としての神の國は現在にあり、となり。本章に説かるゝところ亦之に同じ。現在の神の國は、人々の「衷」にあり。それは將來「人の子の日」として、外的に實現すべし。榮光の中心が、イエスなる事に於ては、二者同一なれども、唯その態様の相違のみ。この榮光は、現在に於ては、聖靈に由りて「衷」に隠れ、而してこの榮光は、現に至聖所を充すなるも、之を認むる者は、唯神及び神を拜する人々のみ。然れども、將來この榮光の、普く天を蔽ひ、隈なく地を充す時あらん。「人の子の日」は即ち其なり。

神の國に二個の態様ある事、以上の如し。而して此第一態様より、轉じて第二態様に移らんとする間に、起るべき種々の事件につき、主は弟子等を教へ給ふところあり。第一は、イエス御自身「多くの苦しみを受け」給ふべき事なり。第二は、弟子等「人の子の一日を見たく欲」へども、それを見ざるの故を以て「沮喪」することなくして、絶えず祈りすべく、而して昔者イサク野に出で、リベカを見んと待ち構へし如く、又後年ベテロが、屋上にて祈りせし如く、弟子等も野に出で、「人の子の日」を待望み、又は屋上にて祈りすることあるべしとなり。更に主は一步を進めて「人の子の日」の實現する刹那の状況を説き給ふ。此時世人の食に飽き飲みて狂する状は、恰もノア或ひはロトの時の如けん。やがて「人の子の日」は、電光の如くに彼等の頭上に臨まん。而も其時、此日を待望みて祈りする者と、又然らずして、猥りに飲酒飽食、現狀を以て満足する者とは、甚だ明白に區別せらるべしとなり。



此エホバの日に、前二者の區別せらるべきことは、イザヤも之を認めたるものゝ如し(賽三〇十、三十三〇十四—十六)。馬拉基の預言に、暗夜を破る義の太陽の光輝は、一方に於て義人を醫すと共に、他方に於て惡人を燒盡すべき由録されたるも(馬三〇及四〇)亦前に同じ。それエホバの日は、是非を鑑別する日、善惡を審判する日、一人は取られ、一人は遺さるゝ日なり。

次に留意すべきは、ロトの妻に關する主の御警告なり。ロトの歴史を讀みて、ロトは如何、ソドムの人民は如何、と尋ぬるのみならず、ロトの妻の末路に留意せざるべからず。彼女の亡びたるは、ソドムに於てならず、實にソドムとゾアルとの中間に於てなり。彼女はソドムより携出されたことを、救出されたるものとは思はずして、追放されたるものと思ひしなり。かのエヂプトを出で、カナンに到らずして、曠野に亡びたるイスラエル人中の多數も亦、ロトの妻と同様の思考を有ちたるにはあらず

りしか。さて我等自身は如何。此世界より、主義に由りて分離せられたる我等は、其を以て、追放せられたるものと認むるや。將又、其處より救出されたるものと認むるや如何。イスラエルは、紅海の彼岸に立ちて、出埃及を謳歌したり。我等は事實上、此主義に於ける分離を謳歌する者なりや。又は曠野に於けるイスラエルの如く、エヂプトの「魚、黄爪、水爪、韭、葱、青蒜等」(民十一〇五)を欲求するものなりや。ロトの妻は後方を顧みて、鹽の柱となりぬ。彼女は、ソドムより追放せられたりと思ひて、歎きしなり。我等は、ソドムより救出されて、主に贖はれたる者となりたるを、謳ふ者なりや如何。「ロトの妻を憶へ」とは、本問題中に於ける重要な訓言の一として、宜しく我等の心靈に銘刻すべきものなり。

既に述べたる如く、現在に於ける神の國は、所謂「爾曹の衷にあり」の状態なり。換言すれば、大能の内在といふ事が、神の國の特色なり。聖靈が、慰むる御方として、我